
魔法少女リリカルなのは 夢甦る銀槍

ルオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 夢甦る銀槍

【Nコード】

N7891U

【作者名】

ルオト

【あらすじ】

少女は自らの夢を親友に託し死んだ。だが運命の悪戯か、少女は二度目の生を受ける。だがそこは少女が生きていた世界ではなく、似ているが全く異なる世界だった。

そこで少女は自分とどこか似た境遇の少女と出会い、家族となる。本来出会うことの無い少女達との出会いが、少女の夢を変える。

第一話 目覚めと出会い

そこは深い闇の中だった。少女はその暗闇の中に漂っていた。ここでは時間などあってないようなものだった。少女にとってもそうだった。ここにいつからいるのかも覚えていない。

「？」

その闇の中で少女は二つの光を見つけた。銀色に光る懐かしい光と青いやさしい光。

少女はその光に手を伸ばした。その行為には理由がなかった。直感なのだろう。少女は手を伸ばし、光に手を触れた。瞬間、声が聞こえた。

『あなたの願いは？』

「私は……生きたい」

少女はかつて自分が願った夢を躊躇わず答えると、銀色の光は一匹のモルフオチヨウへと変化し、青い光を浴び一本の銀色のロッドへと変化した。

そして青い光は輝きを増し、少女とロッドを闇の外へと救い上げた。

青い光に照らされる中、少女に耳に懐かしい声が聞こえた。

『また明日ね』

「???. . . あ、亜梨子！」

少女は声の主、親友の名をとっさに口にしたが、少女の意識はそこで途切れた。

「ん。ここは？」

少女は目を覚ますとそこは見知らぬ部屋のベットの上がった。そこは自分が入院していた病室でもなく。一度だけ見たことのある親友の部屋でもない。もちろん実家にある自分の部屋でもない。

妙に部屋に物が無いが、掃除自体はしっかりされている。

なぜ自分がこんな所のベットに寝ているのかまるで見当がつかない。

そもそも自分は……

「？……わたし、生きてるの？」

自分で自分の口にした言葉が信じられない。そう自分は確かに死んだ。しかも二度死んでいる。

一度は肉体的な死。そして二度目は親友に自分の夢を託して死んだ。間違いない。確かにあの流星群の夜に自分は親友に自分の夢を託し、大切な親友を自分によく似た、自分より少しやさしく頼りになるあの少年に託し逝ったのだ。

なのに自分はまだ生きている。

少女は恐る恐る自分の頬に手を当てる。

確かな感触。これが夢や幻ならとてもリアルで残酷な設定だ。

少女は慌てて自分の姿を確認しようと周囲を見渡す。ちょうど窓ガラス

にぼんやりと映る自分の顔。それを見て少女はさらに驚愕を浮かべた。

そこに映っていたのは生前の自分の顔。もういないはずの人間の顔だった。

「一体、何が起きたの？」

少女が困惑していると部屋の扉が開かれ、入って来たのは車椅子に乗る九歳くらいの少女だった。

「お、やっと気がついた。家の前で倒れてるの見つけた時は、ほんまビックリしたわ」

車椅子の少女はそう言いながら、少女に近づく。少女は車椅子の少女の雰囲気誰かに似ているような気がして、少しだけ考え、すぐに答えが判ると、自然と笑みがこぼれた。

車椅子の少女の雰囲気が親友の亜梨子にどこか似ている。

「お、少しは元気が出たみたいやな。ほな、自己紹介や。私は八神はやて」

「………摩理。花城 摩理」

親友に夢を託し、死んだハンターと闇の運命を刻まれた魔道書の主となる少女。

本来出会う事の無いはず二人の出会いが、一体どのような結末をもたらすのかは、この時点では誰も知らない。

第一話 目覚めと出会い（後書き）

思いつきで新小説始めてしまいました。正直自分でも小説一本はキツイと思いますが、頑張って更新していきたいと思います。

第二話 新しい世界 新しい家族

摩理は混乱していた。死んだはずの自分が生きている事は勿論、今の状況にも困惑していた。

車椅子の少女、はやての話によれば摩理は家の庭に倒れており、はやてが慌てて救急車を呼ぼうとしたのを止めたのも摩理自身だと語った。

「いやあ、私もホント驚いたわ。朝起きて洗濯干そう思ったら、庭に人が倒れてるとは思わなかった。しかも同じ年くらいの綺麗な子やから、さらに驚きが倍や」

綺麗と言われ摩理は少しだけ頬を赤く染めたが、はやての言葉に聞き逃す事の出来ない一言に眉をひそめた。

「同年？」

「へ？もしかして年上？私はてつきり、同年かと思ったんやけど・・・」

そう言われ摩理は改めて自分の体を見た。自分の記憶よりはるかに小柄な体。確かにはやてと同年くらい、九歳前後の体だ。

(・・・どういう事？生きているだけじゃない。体も縮んでいく。それに体の調子も良い。まるで亜梨子になった時のような体の軽さ。まさか病気まで治っているの!?)

自分の状況に、困惑を超えた理解不能の状況に摩理は混乱しそうになったが、自分にとってもう一つ確認すべき重大な事柄が在る事を思い出し周囲を見渡す。

はやては不思議そうに首をかしげるが、今はそんな事はどうでもいい。

周囲にはいない、なら部屋の外かもしれない。

「・・・その、聞いてもいい？私が倒れていた周囲に蝶が飛んでいなかった？銀色の蝶」

「?そないな綺麗な蝶がいたら、絶対捕まえるわ」

はやての言葉に摩理は納得した。いや本当ははやてに尋ねる必要もなかった。

かつて摩理の周囲には必ずあのモルフオチヨウいた。あれがいなくなる事などある筈が無い事を摩理はよく知っている。

「あ、でもこれが落ちてたな。この銀色で綺麗な模様の彫つてあるロッドと銀色の鎖に金色のリングがついたオシャレなネックレス」

はやてが差し出した物を見て摩理はこの日、最大の驚きを覚えた。「そ、それ。?先生?にあげたはずの!それにそのロッドは!亜梨子の.....」

二つとも摩理の持ち物ではないが、摩理にとって大切な人が持っているはずの物だ。

はやてが差し出した二つを受け取ると、摩理の瞳に自然と涙がこぼれた。

摩理は理解した。ここに二人はいない。だがなんとなく大好きな親友と?先生?が摩理にここで生きる。夢を叶えろと言っているような気がした。

そして摩理が寂しがらないように、二人がプレゼントしてくれたような気がした。

目の前で泣く摩理を見ながら、はやてはこの少女が何故か他人に思えないような気がした。

そもそも見ず知らずの他人を、家にあげ看病する事がどれだけ危険な事かもはやては理解していた。

だがはやてが摩理を見たとき、何故か自分を鏡で見たような感覚に捕らわれた。

実際助け、今泣く摩理を見て、その感覚は間違いではないと改めて確信した。

「泣いたら、ええ。今は私達だけや。我慢しなくてええよ」

今も涙をこぼしながらも、必死で気持ちを押し込めようとする摩理をはやてはそつと抱きしめた。

摩理は一瞬だけ驚いたが、すぐにはやてに身を任せはばかる事無く大声で泣き出した。

そんな摩理を見ながらはやては決めた。この子を絶対一人にしな
いと。

「……………ごめんなさい。いきなりあんな大声で泣き出して」

「ええよ。人それぞれ事情もあるやろうし。それよりこれからどうするの？帰る家あるの？」

はやての何げない、だが重要な質問に摩理は視線を下げる。

「……………残念だけど、私には帰る場所は無いわ」

摩理がどこか自嘲気味に答えると、はやては少しだけ考えるそぶりを見せ、大きく頷くととんでもない事を口にした。

「おっしや。なら今日から私の家族になればええ。幸い私は一人暮らしや。誰も文句言わへん」

「……………え？」

はやての提案は摩理にとって予想のはるか斜め上だった。

（家族？私とこの子が？なんで、いきなり。それにこんな家に一人暮らし……………あ！）

はやての提案に驚いた摩理だが、その可能性に気付くと、摩理は何故はやてがこんな提案をしたのか理解できた。

（そっか。この子も同じなんだ。私と同じ独りの孤独に耐えていた。ならそうだよな。亜梨子が私にしてくれたように、この子と……………）

「そつと決まれば、まずはご飯や！腹が減っては戦はできん言うし、ちよつと待ててや。今美味しいもんを」

「摩理」

「え？」

「摩理って呼んで。今日から家族になるんでしょ？だから呼び捨てにして」

摩理の言葉にはやては一瞬驚いたが、すぐに満面の笑みを浮かべ。

「なら、私の事もはやてって呼んで。もちろん呼び捨てや」

「うん」

摩理も最高の笑顔浮かべはやてを見送った。

「ごちそうさま。はやては料理がうまいのね」

「あははは。そんな褒めてもらうと照れるわ。で、摩理の体の調子はどうや？痛いところがあるんか？」

「……ないわ。多分、日常生活は問題ないと思う」

摩理自身どこか困惑気味に自分の状態を口にする。

その様子にはやては首をかしげる。

「ところで話は変わるけど、はやて。？虫？って知ってる？」

「虫？それって庭とかにいるアリとか、いも虫とかの事？そんな子供でも知ってるよ」

摩理の質問の意図が判らないはやては、ごく自然とそう口にしたが、摩理は難しい表情を浮かべた。

「噂話でもいいわ。人の夢を食べる？虫？ 聞いた事ある？」

「いや、ないわ。そんな虫の話、聞いた事無い」

「そう。ありがとう」

摩理は安堵したような、少しだけ寂びそうな表情を浮かべるが、はやては摩理の質問の意味がまるで理解できなかった。

(・・・ここには？虫？はいない。ならばやての平穩を邪魔する存在はいなさそうね)

摩理は内心でそう結論する。だが摩理は知らない。この世界に？虫？は存在しないが、代わりに魔法が存在する事を。

そしてこれから二人は魔法にかかわる事を・・・・・・・・

第三話 摩理とはやての生活と起動する闇の書

摩理がはやて共に暮らすようになって、ひと月が過ぎた。

いきなり家族として生活するようになった二人だったが、最初はどこかぎこちなかったが、一ヶ月間生活を共にするうちに今はそのぎこちなさも無い。

「ほな摩理。お味噌汁テーブルに運んで」

「ええ。わかつたわ。はやて」

はやてが台所で朝食の最後の準備をしている中、摩理は出来た料理をテーブルに運ぶ。そんな光景も今は当たり前となった。

（それにしても、はやては凄いわ。料理もそうだけど、たった一人でこの家で暮らすなんて）

家族になったその日にはやての料理の腕前や、足が不自由にもかかわらず、出来る事は自分でやろうとする、はやての姿勢に摩理は何度も驚かされた。

足の悪いはやての手伝いに何度か家事の手伝いをした摩理だったが、摩理は生まれてから家事といえる事をした事が無く、はやてにはかなり迷惑をかけたが、生来の勘の良さもあってか、今ではそれなりにはやての手伝いができるようになった。

最も料理はまだまだはやての域には遠く、今も修業中のみだ。

「いただきます」

「いただきます」

二人は仲良く朝食を始めた。

「まだまだ、私ははやての料理を超えられなさそうだわ」

「そら当たり前や。むしろそう簡単に向かれてたるか。まだまだ摩

理のお師匠様気取りたいしな」

「ふふ。なら今晚もご教授お願いします」

「まかしとき！」

こんな会話も今は当たり前になった。

「そう言えばはやて。午後から病院よね？」

「うん。そうや」

味噌汁を口にしながら、はやては何気ない口調で答えた。

「なら、それまでは時間もあるのね。なら昨日の続きをしましょ」

摩理の提案にはやての動きは静止した。

「……………あ、えつと摩理？昨日の続きって、勉強のか？」

「そうよ。何か問題でもあるの？」

摩理が不思議そうに尋ねると、はやてはどこか言いにくそうにしていたが、意を決して口を開いた。

「そら勉強も大事や、私は平均くらいには勉強できるから、別にそんな慌てて勉強せんでも」

「そう？なら、これからどうする？」

「うん。そや摩理。一緒に図書館にいこ。借りたい本もあるし」

「ええ。いいわよ」

摩理は笑顔でうなずいた。

(ふゝ危なかったな)

摩理に気付かれないように、はやては内心安堵の声を漏らした。

別にはやても勉強は好きでも無く嫌いでも無い。だからそこそこの程度の実力をキープできる程度の学力を身につける程度に勉強していたが、その自信は摩理によってあっさり崩された。

摩理がどの程度勉強ができるのかと、面白半分に一緒に勉強しようと言ったのが間違이었다。

摩理は小学三年生どころか、中学レベルの学力がある事をはやて

は知ったのだ。しかも異様に教え慣れている。算数で分からないところを摩理は優しく教えてくれた。

そこまでならはやても特に気にしなかった。

摩理は気付いていないが、どうにもはやてに何かを教えるという行為その物を気に入ったらしく、摩理はいつの間にかはやての家庭教師的な存在となっていた。

しかもはやて用に問題集などを作る徹底さ。おかげではやての勉強ペースは以前の二倍以上に早くなり、もうすでに小学三年生の範囲を終えようとしていた。

これ以上ペースを上げられたら、来年には中学レベルの勉強をさせられるかもしれない。

それはそれで構わないのだが、何となくはやてはそれが嫌で今回は勉強を断ったのだ。

「そつや。摩理の夏服、買わなあかな。病院の帰りにデパート寄ろうか」

「そつね。でも、明日ははやての誕生日でしょ？今日は明日の為にパーティーの買い出しをした方がいいんじゃないかしら？」

「なら両方や！そうなると、病院の帰りは大荷物になるかもな」

「そのあたりは上手く加減しましょう。ならばはやて洗い物は私がやるから、先に出かける準備を始めた方がいいわ」

「そやな。なら先、準備始めるわ」

そつ言つと、はやては車椅子を操作し、自分の部屋へと向かった。

摩理は洗い物を手慣れた手つきで終わると、自分の部屋 毎日はやてと一緒に寝る為、ほぼ私物を置くために使ってる部屋 へと向かった。

簡単な着替えを済ませ、？先生？に送ったペンダントを身につけ、銀色のロッドを手取る。

「…………アリスも一緒に行く？」

『イエス、マスター摩理』

ロッドの言葉に摩理は笑みを浮かべた。

摩理の持つロッド。これに意思がある事に気付いたのは、はやてと出会ったその日の深夜だった。

ロッドがいきなり話しかけてきた時は、さすがの摩理も悲鳴をあげそうになった。

ロッドが自らの名をアリスと名乗った時は驚いたし、口調が全然違うから最初は気付かなかったが、声も亜梨子と同じ声だということにも驚いた。

そしてアリスの説明によると、摩理はもう虫憑きでは無いが、アリスを使う事によって虫憑きの能力を使う事が出来ると言われた。しかも消耗するのは？夢？では無く、魔力だと言われた。

半信半疑だった摩理だが、アリスを使い同化してみると、それは？虫？と同化するのと同じだった。

しかも魔力の消耗は？夢？を消耗するよりはるかに楽で、効率的な事もわかったし、訓練しだいで他にも「魔法」を習得可能だと言われた。

しかし摩理は魔法の習得をせず、はやてとの暮らしを優先することにした。

アリスについても必要以上に使わない事を決め、アリスにもその事を話した。

機会が来たら、はやてにもアリスの事を紹介しようと摩理は決めていた。

今の摩理にとってアリスは武器では無く、はやてと同じくらい大事な友人となっていた。

「今日は、図書館と病院。それと買い物よ。アリスにはつまらないかもしれないわよ？」

『問題ありません。それはそうと、明日ははやてさんの誕生日ですね』

「ええ、そうよ。それがどうかしたの？」
『でしたらサプライズで、私を紹介しては？』
アリスの提案に摩理は微笑を浮かべた。
「ふふふ。アリスは悪戯好きね。そうね。そうしましょう」
摩理はそう言うと、アリスを専用のケースに仕舞い、待っている
だろうはやての下に向かった。

その夜、はやても摩理も明日のプランを話しあっていた。はやては久しぶりの一人では無い誕生日に心躍らせ、摩理も初めての友達の誕生会に心を躍らせていた。

はた目から見たら、どちらの誕生日か分からなくなるほどの、はしゃぎぶりだ。

「あ、もうこんな時間や。そろそろ寝ないと明日になってしまうな
ー」

「そうね。明日起きたらまず初めに、『お誕生日おめでとう』って
言いたいしね」

そう言うと二人は布団にもぐりこんだが、どちらもまだ眠ってはいない。

そしてちょうど日付が変わった瞬間、はやての部屋に異変が起きた。
た。

「なんやこれ！」

はやての部屋の雰囲気が激変し、はやての部屋に置いてあった鎖で封じられた十字の紋章のある本が中に浮遊している。

しかも床には魔法陣が浮かんでいた。

摩理は瞬時にはやてをかばうような態勢になると、目の前の本を睨みつける。

（失敗したわ。アリスは私の部屋。もしこの本が危険な物なら拙いわ）

摩理は己の失敗に後悔したが、すぐにその事を思考から取り除いた。すでにその表情は戦闘態勢。多くの虫憑きを欠落者へと変えた冷酷なハンターの顔になっていた。

だが事態は摩理の予想を超えていた。

はやての胸から白い光が吸い出された。

（これは……魔力？）

白い光が魔力だと気付いた摩理はとっさに、はやての魔力をはやてに戻そうとしたが、一瞬遅かった。

本が光を放ち、部屋の視界が無くなった。

摩理はとっさに目を隠し光が収まるのを待った。そしてそこには

……

「「え？」」

はやて、摩理は同時に驚きの声を上げた。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にごぞいます」

「夜天の主の下に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

恭しく膝を折り、主の言葉を待つ四人の騎士がそこにいた。

第三話 摩理とはやての生活と起動する闇の書（後書き）

摩理の家事スキルが分からず、こうなりました。

後、摩理の口調ですが、はやての影響で少し砕けたという設定です。

さて次の話は、守護騎士とはやて、摩理との出会いです。

第四話 守護騎士と主

ヴォルケンリッターの将シグナムは主とともにいる少女に、疑念と興味がわいた。

見れば主と年は変わらないが、その視線には怯えや恐怖、戸惑いさえ無い。あるのはただ鋭い槍のような視線。

その視線をシグナムは知っていた。敵を前にした戦士の視線その物だ。

そんな視線を自分に向ける事が出来る、この少女は何者なのか？
そしてその視線に見合うだけの實力を持っているのか？

摩理は視線で牽制をしているが、内心では焦っていた。摩理の手元にはアリスが無い。

そんな状況で四対一。しかもはやてを守りながら。ここまで不利な状況での戦闘は虫憑きだった時にも経験した事が無い。そこまで考えて、自虐的な考えが浮かび苦笑した。

（ふふ。違うわね。あの頃の私には守るモノが無かった。ただ自分の為に戦って殺してきた。そんな私が不利な戦闘をするはずが無いわね）

戦って不利な戦況になることは何度もあつたが、戦う前から不利な状況は初めてだ。

昔の摩理なら何を犠牲にしようと撤退しただろうが、今はただ自分一人が助かるだけでは駄目だ。はやてと共に撤退それ以外の選択肢はない。

（とは言えどうしたものかしら。この四人虫憑きのレベルで言えば確実に号指定。しかもかなり高い号指定されるでしょうね。大体二、三号指定は確実ね）

摩理が相手の戦力分析、および打開策を考えているさなか、背後から待ったの聲が掛けられた。

「ちよい待ち！そっちの四人も摩理もおちつこ。そーや下のリビングでお茶でも飲みながらそこでゆっくり話そう」

現状に耐え切れなくなつたのか、それとも本気で状況改善の為かはやてはそう提案してきた。

ヴォルケンリッターを名乗る四人は一瞬驚いたが、はやての言葉に従うようだ。

摩理としてもこの場での戦闘は不利要素が多すぎる為、はやての提案に従った。

もちろん移動の際にアリスをこっそり回収し、リビングで戦闘になつた際には即行動できる準備だけは整えた。

「ほな。まずは自己紹介からや。私はこの家の家主八神はやて。そんでこっちが、家族の花城摩理」

同世代の少女しかも名字も違う少女を家族というはやてに四人は何もリアクション無く、自らの自己紹介を始めた。

「私はヴォルケンリッターの将、剣の騎士シグナムです」

「ヴォルケンリッター参謀、湖の騎士シャマルといいます」

「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータ」

「ヴォルケンリッター盾の守護獣ザフィーラだ」

四人の自己紹介にはやてはフムフムと頷く。どうやら友好的にくようだが、摩理は全く別の考えを浮かべていた。

（そうね。彼らが名乗った通りなら、あの参謀を名乗る金髪の女性から潰すべきね。次がああ赤毛の子供ね。感情の制御が未熟ね。仲間を潰されたら激昂して我を見失うタイプね。残り二人犬耳の男とピンクの髪の女性。どちらも潰し難そうだけど、二対一程度ならどうとでも出来そうね）

すでにヴォルケンリッターとの戦闘予測を立てていた。

「で、自己紹介が終わったところで、私がその、闇の書やったけ？
そのの主になつたって事詳しく聞かせてくれんか？」

はやての問いに答えたのは、参謀を名乗るシヤマルという女性だった。

闇の書……魔道士の力の源リンカーコアを蒐集しページを増やし、666頁集めると、主に大いなる力を与える。

「そして、主を守護し、主の為にページを集める役目を持つのが我らヴォルケンリッターとなります」

その説明にはやては考え込み、摩理は呆れた。

(少なくともはやてには無用の長物ね。そんな物騒な物の主なんてはやてが望むはず無いわ)

摩理はそう結論づけると、いよいよこの場が戦場になる最悪の事態を想定した。

「うん、わかった。つまりや、守護騎士みんなの衣食住。主の私がきつちり面倒見なあかんって事や」

「……はっ?」「……」

守護騎士と摩理は同時に驚きの声を上げた。

「え、あの、主、その蒐集は?」

「私は大きな力なんていらへん!せやから守護騎士のみんなはこれから家族として一緒に暮すんや!」

はやての宣言に守護騎士の面々はどこか戸惑った表情を浮かべたが、摩理は逆に微笑を浮かべた。

「そうね。家主のはやてがそう言うならもう決定ね。あなた達、仮にも騎士を名乗るのなら主の決定には逆らえないでしょ?」

「う、うるせい!主でも無いお前に言われる筋合いは」

赤毛の少女ヴィータが噛みつくように摩理を睨むが、摩理は意に介さなかった。

「ふふ。まあいきなり言われてもすぐに納得できないでしょうから、今日はこの程度にして、また明日にしましょ。はやてもそれでいいわよね」

摩理の提案によりこの場はそれでお開きとなった。

守護騎士が現れて、一週間が過ぎた。当初は摩理の時以上に困惑する守護騎士だったが、はやてのもたらず平穩に今ではすっかり慣れたものだ。

また摩理がアリスを皆に紹介した時は守護騎士には警戒され、はやてには「なんでもっと早く紹介せんかった」と怒られたる騒動もあったが、はやてはすぐに怒りを納め、守護騎士たちにも念話のような初歩的な魔法を摩理が習得していないことから警戒を解かれた。その後も様々な騒動や、トラブル。日常的な平穩があった。

はやては勿論、守護騎士もこの平穩を満喫していた。そして摩理も。

だが摩理はかすかに不安があった。

死んだはずの自分がここにいる理由。？虫？の存在しない世界。イレギュラーであるモルフオチョウの能力を持つデバイス・アリス。

そして魔法と闇の書。

もしかしたら？花城摩理？という存在はこの世界でも決定的なバグを起こす存在なのかもしれないという不安を、摩理は感じていた。だが摩理はこの幸せを手放したくなかった。二人目の親友を。血は繋がらないが温かな家族を。存在するはずの無い自分の名を呼んでくれるこの世界を。

だから摩理は決意していた。この平穩を脅かす存在が現れたなら、迷わず滅ぼす事を。

守護騎士が現れてから、数か月がたった。その数カ月は多分、八神はやてにとつて、これまでの人生で一番幸福な時間となっていた。そしてその時間は守護騎士にとつてもそうかもしれない。戦いの無い、ただ平穏な時間。それは守護騎士が初めて経験する穏やかな時間であるのは間違いない。

そして花城摩理にもこの時間は幸福だった。

かつて孤独を癒してくれたたった一人の親友、亜梨子と共に過ごした時間と、同じ穏やかな時となっていた。

この時間は皆が望む幸福となっていた。ある日、はやての担当の医石田から、はやての病状を聞かされるまでは……

その日、はやての定期検診の結果が知らされた。八神家一同に検診結果は今まで通りと報告されたが、何故かシグナムとシャルルのみその場に残される事となった。

その光景に摩理は凄く嫌な予感がした。

そして摩理の予感確信へと変わった。その日の夕食、普段通りの穏やかな時間だが、守護騎士の面々は普段通りなのだがどこか違って摩理には見えた。

はやては気付いていないが摩理には気付けた。シグナム達の雰囲気、気が摩理の症状を隠す医師達のそれに酷似していたからだ。

その夜、はやてが眠ると、ヴィータははやてと摩理を起こさぬようにベットから抜け出した。

眠ったふりをしていた摩理は、ヴィータが抜け出すと音をたてないように起き上がり、周囲の様子をうかがった。

どうやら守護騎士四人で出かけるようだ。

(……………どうやら事情を知らないのは、はやてと私で確定ね。何をするつもりか知らないけど、間違いなく大変な事が起きているみたいね)

摩理はそう結論すると、部屋に戻り簡単な着替えとアリスを手にし、シグナム達の後を追う事にした。

庭に出た摩理はアリスを起動させる。ロッドは銀色に輝く彫刻の様な槍へと変化する。

変化した槍から触手が伸び、摩理に突き刺さる。突き刺さった触手は銀色の模様となり、摩理の右腕と左足に浮かび上がる。

かつて虫憑きだった頃と同じ模様、同じように湧きあがる力。そしてモルフオチヨウが備えた？不死？さえも殺し、？始まりの三匹？をも殺しうる、世界に生れるはずの無いバグたる力をアリスと同化した事によって再び手にした摩理。

摩理は数回ほどアリスを振るうと、自身の状態の簡単な確認を終えた。

「この程度で十分ね」

摩理はそう言うのと、跳躍し、向かいの家の屋根に着地する。

アリスをかざし集中する。この数力月簡単な魔法をシャマルに教えてもらっていた。その中に探查魔法というものがある。それと、アリス自身の探查能力を合わせる事によって、今の摩理では本来探查できない範囲まで相手の気配を探す事が出来る。

数秒後、摩理の感覚に馴染みある四つの魔力の気配と、全く違う二つの魔力の気配を感知した。

その二つは明らかに関係無いので、四つの魔力の気配の元へ向かう摩理。

摩理は久しぶりの同化に体を馴らすように、徐々にペースを上げる。その動きは人間の運動神経をはるかに超えた動きだった。

もつともこれでも完全に同化させているわけではなかった。摩理はあえて不十分な同化にとどめた。

理由はかつて？先生？に「摩理の力はバグだ。使えば世界を変え

る。そしてその変化を元に戻そうとする存在と戦う事になる」という警告の所為だ。

そしてそれはこの世界でも同じだ。否、場合によっては？先生？が危惧した以上バグに花城摩理という存在はなっているのかもしれない。

その懸念が摩理に全力を出すことを躊躇わせていた。

走ること数分、四人を目視する。

ビルの屋上。しかも自らのデバイスを起動させ、騎士服まで身に纏っている。

摩理は足に力を込め、思い切り跳躍し四人の目の前に着地した。

「ま、摩理ちゃん？」

四人とも突然登場した摩理に驚いていた。

シヤマルもいきなり現れた摩理を思わず呼んだだけで、現状を理解してはいないだろう。

「……摩理。どうしてここにいる？」

真っ先に我に返ったのはシグナム。さすがヴォルケンリッターの将を名乗るだけの事はある。

「ふふふ。夜の散歩よ。あなた達と同じに、ね」

「な、ふざけんなよ摩理！私達がしようとしてる事、止めに来たんだろー！！」

「ふーん。つまりあなた達は、私が止めるような事をするつもりなのね？」

摩理の返答にヴィータはカマをかけられた事に気付き、顔を歪める。

「……ならお前は何をしに来たのだ？本当に散歩だけでは無いのだから？」

ザフィーラの問いに摩理は頷く。

「私の目的は確認よ。」

「確認？」

眉をひそめるザフィーラ。他の三人も同様だ。

「ええ。今日の診断結果、はやての症状。悪化しているんでしょ？
しかも命の危機もある程度に」

「……！？」

四人の驚きで、摩理は自分の予想が外れていなかったことを確信した。

「そしてあなた達は、はやてを救う手段に心当たりがある。違うかしら？」

摩理の問いに四人は沈黙した。つまり摩理の推測を肯定したという事だ。

「……はやてを闇の書の本当の主にする」

「本当の主？」

グイータの言葉に摩理は首をかしげた。

「そつだ。はやてが闇の書の本当の主になれば、はやての病気は治る。少なくとも進行は止まる筈だ！」

グイータの態度は必至だ。嘘をついている様子は無い。

闇の書の本当の主。つまり蒐集をし、闇の書を完成させるという事だろう。

その為にはリンカーコアを集めなければならない。その為にデバイスを手に、騎士服を身に纏ったのだらうと、摩理は納得した。

「摩理。もしお前が我らを止めようとするなら、たとえお前でも……」

……

シグナムはデバイスレヴァンティンを構えた。もし摩理が止めると言えば、間違いなく戦闘になるだらう。

他の三人もすぐさま戦闘態勢に入る。だが摩理は……

「で？どこで狩るの？」
と訊ねた。

「……はっ？」「……」

四人は呆気にとられたように口をあける。

「はやてを救う為に必要なんでしょ？なら早く行きましょう。それ

ともまだ何かあるの？」

摩理の発言に四人は絶句した。

「別にあなた達は相手を殺すつもりは無いんでしょ？なら問題は無いわ」

「え、あ、摩理ちゃん。分かってて言ってるの？蒐集はそんな簡単な事じゃないのよ。相手は無抵抗じゃないし、最悪命を落とすことだって」

「だから何？相手が何者でも、どれほど困難でも、そんなこと関係無いわ。はやくとあなた達家族を守る。私が願った夢の続き。その邪魔をさせない」

摩理は四人を見据える。その目はこの数カ月見てきた、普段のどこか儂げな雰囲気のある摩理の目では無い。

出会った最初、四人を見つめた戦士の目だ。

「わかった。だが、足手まといになる様なら、今後蒐集には参加させない」

「ッ！？シグナム！？」

シャマルは驚きの声を上げるが、ヴィータ、ザフィーラは何も言わない。

摩理が絶対引かない事をこの数カ月の生活で理解しているからだ。「では遅れるなよ、摩理」

シグナムがそう言くと、三角形の魔法陣が地面に映し出され、五人の姿が消えた。

「……………魔法に異世界。話には聞いていたけど、ここまでとは思わなかったわ」

それが正直な摩理の感想だった。先程までいた海鳴の町では無く、見渡すばかりの荒野の高台。

一瞬で移動したのだが、あまりのギャップに摩理は驚きを隠せなかった。

「さて摩理、お前にも蒐集を手伝ってもらうが、お前の実力を私たちは知らない。そこで一人でこの世界の魔力を持った原生生物を倒してもらえるか？」

「構わないわ。で、獲物は？」

「そうだな……………とりあえず」

シグナムが獲物となる生物を探す中、大量の土煙を見つける。

サイにも似た凶暴そうな動物の群れだ。ざっと見ても、60匹はいそうな群れだ。しかもかなりの興奮状態だ。

「ちようどいい獲物ね。シグナムさん、あれでいいわよね？」

「な！？馬鹿を言うな！！」

「そうよ。あんなの私達でも一人では無理だわ」

「ちよつと待てよ摩理」

「そうだ、いくらなんでも無謀だ」

シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラが口々に止めるが、

摩理はにこりと微笑むと、四人を振り切り、崖を飛び降りた。

「な、あの馬鹿！」

ヴィータは真っ先に駆け出し、三人もそれに続く。摩理は飛行魔法はおるか、高高度落下のリカバリーさえ習得していない。この高さで落ちれば、まず間違いなく大怪我もしくは死。

慌てた四人を止めたのは、眼下に突如舞い上がった、銀色の粒子だった。

落下する摩理はアリスに頼みバリジャケットを構築してもらった。摩理の姿が一瞬で変化する。漆黒のタイツにウエア。短いホットパンツにブーツ。そして白衣化を改造しベルトを着けたコートと口元を隠すためのマフラ―。

かつて狩りをしていた時に纏っていた装備が、アリスによって再現される。

「さつて、久しぶりの狩り。ちょうどいいウォーミングアップが出来そうね」

摩理はそう言うと、アリスから触手が伸び摩理の体に突き刺さる。一瞬で同化状態の証である銀色の模様が浮かべ、摩理はアリスを思い切り横薙ぎに振りぬいた。

アリスから大量の銀色の鱗粉が吹き荒れる。

摩理の横薙ぎに合わせるように鱗粉も同じ軌跡を辿る。銀色の刃のように、銀色の衝撃波のように、摩理の放った鱗粉はサイの群れを襲った。

鱗粉の勢いと強化された身体能力を使い、華麗に着地した摩理は周囲を見渡す。

摩理の一撃で十数匹のサイは倒せたが、まだ半数以上は残っていた。

サイの群れは摩理を外敵と認知し、猛然と摩理に向かってくる。摩理は好戦的な笑みを浮かべながら、再びアリスを横薙ぎに振った。

槍でもあるアリスは前列のサイをことごとく一撃で行動不能にし、槍の軌跡と共に放たれる鱗粉が後続のサイを薙ぎ倒す。

それでも群れとしてはまだまだ半数も倒せていない。

仲間が倒されてなお突撃するサイ。そのおかげが一匹が摩理の目の前まで迫れた。

摩理はその愚直な突進を避けもせず、真正面から受け止めた。

サイに人間並の知能があったら驚愕しただろう。見た目儂げで幼い少女が、自分の様な巨体を片手で受け止めたという事実を。

そして恐怖した。摩理の浮かべる冷酷な笑みを。

摩理は片手でサイを持ち上げ、後続の群れに思い切り投擲した。

サイ同士の衝突に群れはさらなる混乱に陥った。

摩理はその様子を確認すると思い切り跳躍し、群れ全体を視界に入れた。

アリスに魔力を込める。今までは半ば勦を取り戻すための小手調べ。摩理が本格的に力を込めて槍を振るうのは今回が初めてだ。

十分に魔力を込めたアリスを摩理は全力で振りおろした。

放たれた大量の鱗粉は先程までの威力の比では無く、群れ全体を一撃で飲み込んだ。

歴戦の騎士であるヴォルケンリッターは、目の前の光景を啞然とした様子で見っていた。

摩理が戦士である事は知っていたが、ここまで圧倒的な力を秘めているとは思わなかった。

通常の魔法（ミッド式やベルカ式）とは異なる魔法。いや、摩理が使ったのは魔力を使用する違う何かと説明されても納得できる異質な力だ。

そして圧倒的な数を前にして恐れぬ精神と、まるで準備運動の様に簡単にあしらう戦闘の様子に四人は知らず戦慄する。

一体どのような経験を経れば、このような事が出来るのか想像さえつかない。そして同時に思う。？花城摩理？という存在が敵で無かった事に心底感謝した。

「で？合格ですか？」

「これほどの事をされては、不合格とは言えない。改めて摩理。主はやての為に協力してくれ」

シグナムはそう言うのと手を差し出した。

摩理は少しだけ、驚きと喜びにも似た表情を浮かべたが、すぐに微笑を浮かべ、シグナムの手を取った。

「ええ。もちろんよ」

その日、ヴォルケンリッターは再び闇の書の蒐集を開始した。

その日、この世界にとってバグたる少女が、再び槍を手を取った。

願いはただ一つ。？家族を守るため？

呪われた魔道書の騎士達と？ハンター？の名を持つ存在しないはずの少女の家族を守る戦いが始まった。

第五話

守護騎士とハンター

後編（後書き）

摩理と守護騎士の蒐集開始の話ですが、摩理の強さを上手く表現できたか不安です。

むしろ強すぎたか？とも思います。

一応今の摩理の強さは、原作の「夢まどろむ迷子」で？かなかな？と対峙した時の強さをイメージしていますが………ちょっと自信がありません。

さて、次の話から原作キャラをどんどん登場させる予定です。

また、ほかのムシウタのキャラ登場は現状未定です。もし意見、要望があつたら感想に書いてください。

第七話 VS管理局

まどろみの中、摩理は不思議な夢を見た。

やさしい母が娘とピクニックにいつている夢。

それ自体は何ら不思議では無い。だが摩理は母親と二人でピクニックに行った事は無い。

摩理はとっさに違う誰かの記憶ではないかと思った。なら誰の記憶か？

真っ先に思い浮かんだのは摩理の親友の亜梨子だが、亜梨子の母は亜梨子が物心つく前に亡くなったと聞いている。

顔を確認したいが、夢は輪郭がぼやけ、登場人物の顔を確認させない。

だが娘の方が摩理の方へ視線を向けた。

『摩理。あなたの？夢？は何？』

『え？』

夢の中の人物に訊ねられ、摩理は驚きの声を上げたが、直ぐに自らの夢を口にした。

『私は生きたい。大切な人達と共に生きたい』

『私の？夢？と似てるね。……………もう時間だね。今度はもっとゆつくりお話しようね』

その時まで見えなかった娘の顔がはつきりと確認できた。流れるようにきれいな金髪に赤い瞳の少女。

それを認識した瞬間、摩理は現実へと戻った。

目を覚ました摩理は周囲を見渡す。本が並んだ室内を見て思い出す。

（ああ、今日ははやてと一緒に図書館に来たんだっけ。それで……

…絵本を見ているうちに寝てしまったのね)

最近の摩理はよく夜更かしをするため、昼間にふと眠気を覚える事があった。そして今回は耐え切れず眠ってしまったようだ。

(それにしてもこの絵本を見ながら眠ってしまったなんて……)

摩理は苦笑した。絵本のタイトルは「魔法の薬」

かつて摩理が何度も読み返した絵本で、摩理にとつてとても特別な意味を持つ絵本だ。

はやてと暮らすようになってから絵本を見る機会が無かったので、懐かしさのあまりつてに取ったら眠ってしまった。

(私も疲れているのね。シグナムさん達ほどでは無いけど、私も蒐集に参加してるから、無意識に疲れがたまつたのかしら？それにあの夢は……)

摩理はあの金髪の少女に見覚えが全くなかった。摩理の記憶では金髪の知り合いなど、？霞王？くらいだ。もつともあの戦闘狂があるな穏やかな少女時代を送っているところを摩理は残念ながら想像出来ない。

(まあ、考えてもしょうが無いわね。さてと、そろそろはやてと合流しましょう)

摩理は図書館を歩きながらはやてを探した。

はやては見知らぬ少女と雑談していた。

「あ、摩理！紹介するでこの子、月村すずかちゃんや」

どうやら、本を探している最中に仲良くなったようだ。摩理は微笑しながら自己紹介をした。

「初めまして、花城摩理です。よろしくね。月村すずかさん」

「あゝ堅いで摩理。もっとフレンドリーにいくべきや！」

「はやてはフレンドリーすぎるわ。もう少し上品にした方が女の子らしく見えるわよ」

「なッ！？まゝり〜！うちのどごが女の子らしくない言っんや！」

はやてと摩理の掛け合いに、すずかは思わず噴き出した。

「ご、ごめんなさい。でも花城さん、最初見た時は凄く綺麗で大人

っぽいイメージだったけど、はやてちゃんと一緒だとイメージかま
るで違くて、つい」

「別に気にしなくていいよ。摩理も私と暮らし始めた頃とずいぶん
性格変わったし」

「ええ、そうね。どこかの関西弁の女の子に鍛えられてるから」

「どこの関西弁の女の子やるな、純真な摩理を、こつまでハッキリ
モノ言う子に変えたんわ」

「さて誰かしらね。それはそうと、すずかさん。私の事は摩理でい
いわ」

「なら、私もさんづけは、ちょっと……」

「そう？ならすずか、よろしくね」

「よろしくね、摩理ちゃん」

その後、シグナムが迎えに来たのでその場を別れた、はやてと摩
理は家に帰り夕飯の支度をしていた。

シグナムは帰ってこないヴィータとザフィーラを迎えに再び、家
を出た。

シヤマルははやてと摩理の手伝い。あくまで手伝いだ。

かつてシヤマルに料理をさせ、その料理を口にした摩理は、一瞬
で意識を刈り取られた。

摩理は思うシヤマルの料理は、きっと最強の虫憑き達的能力を超
えた、最強の破壊兵器だと。

この料理を再び口にするくらいなら、摩理は最強の虫憑き達と戦
った方がマシだと……

「それにしても、三人とも遅いな」

料理はもう下ごしらえを終え、後は三人が帰ってくれば最後の仕
上げを終わらせ食べられる状態だ。それに三人が夕食の時間に遅れ
る事など今まで無かった事だ。

「そうですね。そうだ！私、探してきます」

そう言うと、シャマルはエプロンを脱ぎ、摩理やはやてが止める間もなく家を出て行った。

その様子に、摩理はあからさまに不自然さを感じた。シャマルの慌てようただ事ではない。

「……………私も行くわ。はやて。少しだけ待っててね」

「ちよお、摩理！」

はやての制止を聞かず、家を飛び出す摩理。周囲にはすでにシャマルの姿は無い。

摩理は無言でアリスを取り出し、意識を集中。シャマルの魔力の気配は高速で移動中。

シグナム達の魔力は、おそらく結界を張っているのだろうか妙に曖昧だ。そこまではいい、結界内にはシグナム達以外にも複数の魔力の気配がある。その一つは摩理にも心当たりがあった。

この世界にいる高レベルの魔力保持者の気配だ。

（シグナム達、まさか効率を優先するあまりに、この世界の魔道士に手を出したの！？あれだけリスクのあるこの世界での蒐集をしてはいけないと釘を刺したのに！）

摩理は蒐集を開始する際、シグナム達にこう言った。

（自分達の縄張りでの狩りは絶対するなと！）

かつて摩理が狩りをしていた時も、自分のいる病院周辺での狩りだけは絶対しなかった。

理由は単純。もし自分の拠点を知られれば、それだけ先手を取られやすい。

先手を取られれば、思わぬ負傷や予想外の事態に陥る可能性が高くなる。

そして何よりはやてを自分達のがままに、巻き込む可能性も大幅に増える。

だから摩理はこの世界にいる魔道士には絶対手を出さなかったし、居場所についても何も口にしなかった。

多分焦つての行動だろうが、蒐集はあくまで殺してではない。相手は必ず生かす。その誓いが在るのだ。

生かした相手の報復などを考えれば、この世界でだけは蒐集をしてはいけない。

だがこうなってしまうては、仕方ない。摩理はアリスを起動させる。

一瞬でバリアジャケットを纏い、アリスが槍へと変化。

触手が摩理に突き刺さり、銀色の模様がアリスを持った右手と左足に浮かび上がる。

(準備万端ね。お願い間に合つて)

摩理は夜の街を疾走した。

「くツ！放しやがれ！」

バインドで拘束されたヴィータは、目の前の黒髪の執務官と金髪の民族衣装型のバリアジャケットを纏った二人の少年に噛みつかんばかりの勢いで、睨みつける。

「悪いがそれは出来ない。君達が民間人への暴行を加え、さらに最近起こっている魔道士襲撃事件の容疑者となれば放すわけがない」

管理局の執務官・クロノ・ハラウンが油断なくそう言うと、ヴィータは悔しげに表情を歪ませる。

(ちくしょう。捕まるなんて情けねえ！シグナムもザフィーラも今は囑託の魔道士とその守護獣の相手で手が離せねえ！シャマルはバツクアップ専門。どうやってもこの二人を出し抜くのは難しい)

ヴィータは悔しげに現状を分析していた。だがヴィータにはまだ起死回生の手段があった。

摩理の存在だ。摩理ならこの二人を圧倒するし、助けを求めればすぐにでも駆けつけるだろう。だがヴィータはそれをしなかった。

理由は摩理がこの世界での蒐集を拒んでいたからだ。だがヴィー

夕達は今回だけは摩理の意見を無視し内密に蒐集を行おうた。

結果はいまだターゲットの少女から蒐集もできず、窮地にある現状だ。

自分達で招いた結果だけに助けを求めるのは、ヴィータのプライドが許さない。

だからどうにかして脱出しようとしているが、二人ともバインドの強度が強く思うようにバインドブレイクできない。

「さて、詳しい話を聞かせてもらおうか」

「クロノ、上だ!!」

金髪の少年、ユーノの叫びでクロノは上を見てゾツとした。頭上には今まで何故気付かなかったのかと疑問に思い程の魔力を槍に込めた白衣にも似たコートを纏った少女が、今まさにそれを振り下ろそうとしていた。

「ツッ!プロテクション!」

ユーノがとつさに張った防御呪文。そのお陰でクロノは槍の直撃だけは避ける事が出来た。かに見えた。

槍は一瞬だけプロテクションと拮抗したが、次の瞬間、槍はあっさりとユーノのプロテクションを破壊した。

クロノはその一瞬で槍の一撃を完全に回避したが、槍から放たれた銀色の粒子は完全に回避は出来なかった。

「ぐツ!?!」

今まで様々な魔法と対峙してきたクロノだが、始めてみる魔法の一撃に苦悶の声を上げる。いやこれが魔法なのかさえ、クロノには理解できなかった。

「……君は何者だ!」

「ふふふ。気づいていないの?管理局員さん。今、貴方が捕えた騎士の主。そう言えば貴方は私が誰か解るかしら?」

少女の返答はクロノにとって予想外だった。クロノは先程捕えた騎士が何者なのか知っていた。彼女は闇の書の守護騎士。その主を名乗るなら、目の前の少女は闇の書の主という事になる。

「一つ確認する。君が本当に闇の書の主なのか？」

「そうよ。でもさすがに本名は名乗らないわ。そうね、？ハンター？とも呼んで貰おうかしら」

「？ハンター？と名乗る少女はそう言いながらヴィータを庇うようにヴィータの正面に立ち、槍を構える。」

クロノは？ハンター？とヴィータを見る。ヴィータは？ハンター？の登場に驚いている。

単純に後方にいる筈の主が救援に来た事に驚いている様に見えるが、クロノは妙な違和感を感じた。

一方の？ハンター？は口元をマフラーで隠しているので正確な事はわからないが、少なくとも嘘をついている雰囲気ではない。

「……まさか、主、自ら前線に出てくるとは思わなかったよ。管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。おとなしく武装を解除してもら。今なら弁明の機会が君達にも与えられる」

クロノの言葉に？ハンター？は一瞬だけ驚き、直ぐに嗤い始めた。「ふふふ、あははははは。管理局の執務官は優秀だつて噂で聞いたけど、貴方はそうでもないようね。それとも貴方程度でも優秀な部類に入るのかしら？降伏勧告は相手を完全に打ち負かした後か、相手より圧倒的な力を持つ者が言う言葉よ？貴方程度が私に降伏勧告？面白い冗談だわ」

任務中、侮られたり、下に見られる事はクロノにも経験がある。だがこうまであからさまに見下されたのは初めてだ。

しかもあの闇の書の主にだ。クロノは激情に駆られそうになるのを必死に抑え、勤めて冷静に最終勧告を口にする。

「……………つまり降伏の意思は無いと理解していいんだな。だったら手加減しない！」

クロノはそう言うと、手加減無しの砲撃魔法・ブレイズカノンを発射した。

だが、？ハンター？は槍から放たれる銀色の粒子を周囲に展開するだけでクロノのブレイズカノンを完全に防御した。だけではなく、

ヴィータを拘束するバインドすらも破壊した。

「な！？何だそれは！！」

「ふふふ。この程度で動揺するなんて未熟ね。百人の魔道士と戦ってから出直しなさい！」

？ハンター？はそう言っていると、クロノの目の前から消えた。

少なくともクロノにはそう見えた。

「さよなら。小さな執務官さん」

その声はクロノ背後から聞こえた。振り返ろうとした瞬間、クロノは背後から凄まじい衝撃を受け、意識を完全に刈り取られた。

「クロノ！！」

意識を完全に失い、落下するクロノをユーノはただ見ている事しかできなかった。

もし助けに行けば、確実にクロノと同じ運命を辿る。

ユーノはクロノが撃墜される瞬間を見ていた。クロノからは瞬間移動にしか見えなかっただろうが、それは断じて違う。

？ハンター？は防御に使った粒子を様々な場所に銀色の足場として展開し、それを足場として使い、クロノの背後に回り込んだ。

ただその速度が異常なのだ。魔法にも瞬間的な高速移動はあるが、ハンター？はそんなそぶりを見せず、フェイト並み、いやそれ以上の速度でクロノ背後に回り込んだ。

あれだけの速度で、しかも魔法を使うそぶりさえ見せずにあの移動力。考えられるのは単純な身体能力という事になるが、だとするとユーノは全く動けない。

迂闊に動いた瞬間、ユーノもクロノと同じように墜ちる。

「……どうやら時間ね。ヴィータ下に落ちた執務官からリンカーコアを回収して。シャマルがターゲットから魔力の蒐集を開始したわ」「あ、ああ」

ヴィータはやや茫然と返事をしながら、クロノの元へと向かった。「どうしたの？ヴィータを止めないのかしら？」

「残念だけど、君から視線をそらした瞬間、僕もやられる」

「ふふふ。執務官さんより実力差を見極められるようね。正解」

「一つ質問をいいかな」

「ええ、どうぞ」

「君は、何故飛行魔法で移動せず、わざわざ足場を作ったの移動をしたんだ？」

「単純な話よ。私は飛行魔法を覚えて間もないのよ。浮遊するならば十分だけど、高速飛行はまず無理ね。それに足場を作ったの移動の方が速いわ。こんな風に、ね」

「？ハンター？はいつの間にかユーノのすぐ目の前にいた。瞬きの瞬間に移動したようだ。」

その事実にはユーノは完全に戦意を喪失した。

今、一歩でも動けば。いや、少しでも敵意を向けた瞬間、ユーノは？ハンター？に倒される。そう確信した。

その時ユーノには？ハンター？が悪魔に見えた。

敵対するものを躊躇無く倒す冷酷な悪魔に……………

「ふふふ。さよなら」

「？ハンター？はそう言うけどユーノは無防備な背後を見せたが、ユーノはそれをただ見つめる事しかできなかった。？ハンター？に植え付けられた恐怖によって。」

「摩理！どういつつもりだよ！勝手に闇の書の主を名乗るなんて！クロノのリンカーコアを回収したヴィータはご立腹な態度で、摩理に詰め寄った。」

「な？何だそれは！摩理どついう事だ？」

先程放たれた桜色の砲撃によって結界が破壊されつつある中、そんな事を訊ねるヴィータにも、同調し一緒になって訊ねてくるシグナムにも摩理は呆れた。

「今は説明の時間は無いわ。早くこの場を」

離れようと、言おうとした摩理は一人の少女に視線を釘づけにされた。

金色の髪に赤い瞳。水着にも似た黒いバリアジャケットに黒いマントをはおり、手にはポロボロの斧に似たデバイスを持つ少女。

初めてみる、間違いなく初対面だ。だが摩理にはその少女の事を？知って？いた。

「……………フェ、フェイト？」

何故か言葉が口から勝手にこぼれた。

摩理の胸の中にどうしようもない罪悪感、愛おしさが溢れた。

(何これ??誰の想い?なの?)

困惑する摩理の意思を無視し、口が勝手に叫びを上げる。

「フェイト!!!!」

急に自分の名を呼ばれた少女。フェイトは驚きながらも摩理を見る。

フェイトに近づこうとした瞬間、結界の完全崩壊が始まった。

摩理は一瞬だけ躊躇したが、シグナム達と共にその場を離脱した。

「さて改めて訊ねる。どうして闇の書の主を名乗った？」

摩理は何故、助けにいった自分がこうして正座させられ、詰問口調で訊ねるられているのか不思議になったが、とりあえず説明する事にした。

「理由はただのかく乱と、隠蔽。はやての事を出来る限り管理局には知られたくなかったから……………」

「まあ、そうだろうな。現状その方が我らにも都合がいい。シグナムも納得したらどうだ」

「だがザフィーラ。それでは最悪、摩理も犯罪者として扱われる！」

「それはいいわ。私達は家族よ。その程度のリスク関係無いわ。それに……………私の手は元々貴方達以上に血塗れだしね」

最後の呟きだけは聞かれないうちに、意識しながら摩理は答えた。「……分かった。摩理に覚悟があるなら、我らは管理局との戦闘になった時のみ、摩理の事を主と呼ぶ」

シグナムはそう言うと、表情を崩した。

狼モードのザフィーラも犬の様にうづくまる。

「それはそうと、摩理。あの魔道士と顔見知りなのか？」

シグナムは興味本位で訊ねてきた。

フェイトはシグナムの鎧を打ち抜き、ダメージを与えたのだ。武人であるシグナムが興味を持つのは当然だろう。

「残念だけど初対面よ。でも何故か私自身もわからないけど、あの子の事を私は？知って？いる」

ひどく困惑したように言う摩理に、シグナムとザフィーラはさらに困惑したように摩理を見る。

摩理は知らない。自分が生き返る事の出来た原因を。そして？虫？の力以上に摩理の存在はこの世界に取って存在しないバグである事を。

摩理がそれを知るのもう少し先の話……

第七話 VS管理局（後書き）

摩理の性格を少し変えてみました。もともと摩理は人付き合いが
少ないから、内気なので、はやて達との生活で人見知りしない様に
してみました。

そして今回摩理が見た夢と、フェイトとの関係は……………勘の良
い人は気付くでしょう。伏線のつもりですが、上手くいくか不安で
す。

第八話 苦悩の管理局

その日、はやてと摩理はすずかの家に泊まりに来ていた。本来なら八神家で鍋パーティーをも要す予定だったが、守護騎士四人が時間になっても帰らず、三人で鍋は寂しいので急遽、すずかの家でお泊まり会となった。はやては勿論すずかも楽しんでいた。表面上は摩理も楽しんでいたが、実は摩理は内心焦っていた。

現在、守護騎士四人は管理局魔道士たちと戦闘中。しかも前回蒐集した白いバリアジャケットの少女とフェイトがデバイスにカートリッジシステムを取り付けたと、シグナム達から連絡を受けた。戦況は今膠着状態だが、ちよつとのミスでどちらが優勢になるかわからない状況らしい。

本来なら摩理が救援に行けば、一気に戦局を有利にできるが、シグナム達から連絡を受けたのがすずかの家についてからだ。

今、摩理がすずかの家を長時間抜け出すの少し難しい。

なので摩理は直接戦闘をしないなシヤマルに戦局を説明してもらい、状況次第で救援の手助けをする事にした。

そしてほどなく戦況は妙な事となった。

戦場と距離を取っていたシヤマルが前回摩理が倒した執務官のクロノに見つかり、危うく捕えられそうになったが、そこに仮面をつけたあからさまに怪しい男性が救援に現れたらしい。

摩理としてはその仮面の人物の存在はどうにも気に入らなかったが、このタイミング以外での救援は不利にしかならないと思い。行動を開始した。

すずかとはやてに適当な理由をいい、部屋を出ると、すぐさま屋敷を出る。

「アリス。同化して」

「分かりました。摩理」

摩理は短く言うと、アリスが答えた。アリスから触手が伸び、瞬

時に摩理の両手両足に銀色の模様が浮かぶ。同化を終えた摩理は周囲に落ちていた適当な木の枝を拾い、跳躍し月村邸の屋根に登る。

「アリス、お願い」

摩理の言葉と同時に摩理の右手の模様から触手が伸び、持っていた木の枝に同化。

同化した木の枝は瞬時にアリスの起動状態に酷似した槍へと変化した。

本来同化型の？虫憑き？は、形状の条件の合った媒体を自分の武器とする事が出来る。実際摩理も？虫憑き？だった頃は、松葉杖を槍の媒体として使っていた。

亜梨子は専用のロッドを手にするまでは、その辺にある棒状の物を適当に使用していた。

その事からアリス以外の物にも同化させ、武器として使える事は知っていたが、アリス以上の媒体は無いし、今はアリス自体が同化能力の源だ。

無理に他の媒体を探す必要は無い。だが今回は違った。

摩理は擬似的に作った槍を構える。結界の方角は把握している。

途中に障害物は無い。

摩理は現状込められる魔力を、すべて擬似的に作り出した槍に込める。

爆発的な輝きを放つ槍を、結界めがけ摩理は全力で投擲。

管理局の張った結界の強度がどの程度か知らないが、さすがにそれを耐えられるとは思わない。

完全に全力という訳ではないが、かなりの魔力を込めた。

先日見た桜色の砲撃クラスの威力はがあると、摩理は予測していた。「シヤマルさん。今そっちに結界破壊の攻撃をしたわ。着弾後、うまく回避して」

摩理は念話でそう言つと、屋根を降り、はやてとすすかの元へと向かった。

「え？摩理ちゃん？」

今まさに、結界破壊の砲撃を使おうとしたシャマルに、摩理から意味不明な念話が届いた。

摩理が習得している魔法は念話に探查系魔法、そして飛行魔法だけだ。

飛行魔法も同化後の摩理の身体能力が高いため、精々空中に浮く為にしか使わない。

それに摩理の戦闘スタイルは同化を使用した圧倒的な身体能力を存分に使った接近戦。および鱗粉を使った中距離線を得意としている。

つまり摩理にはさすがの家からここまで攻撃する手段を持たないはずだ。

シャマルの知る限りでは。

だが摩理はシャマルの予想外の方法で結界破壊を実行した。

凄まじい速度で銀色に輝く閃光が結界に衝突。数秒の均衡後、結界に穴をあけた銀色の閃光結界の中心部にすさまじい衝撃と共に、着弾。

結界内部は着弾の衝撃と閃光が放った銀色の鱗粉に包まれた。

結界は崩壊し始め、シャマル達には千載一遇の離脱チャンスとなる。

『みんな、摩理ちゃんが結界を破壊してくれたわ。離脱して！』

『『『おっ』』』

その瞬間、守護騎士達は銀色の鱗粉舞う戦場を後にした。

「くっ！逃がしたか」

クロノは舌打ちしそうになる自分を抑えながら、仲間の下に向かう事にした。先程まで対峙していた仮面の男もドサクサに紛れて逃げたようだ。

あれだけ追い詰めながら、結局逃げられた事実にはクロノは頭が痛くなった。

守護騎士四人だけでも辛い相手なのに、？ハンター？を名乗るクロノさえも圧倒する闇の書の主。さらに謎の仮面の男。

今回の闇の書の事件は一筋縄ではいかない。

クロノは改めて今回の事件が、いかに困難かを痛感した。

（正直増援が欲しいな。僕が敗れた以上、あの？ハンター？を名乗る闇の書の主は、アースラ所属の武装局員では歯が立たない。守護騎士と互角に戦っていた、なのはやフェイトも単独での戦闘ではおそらく？ハンター？には勝てないな）

冷静に分析すればするほど、明るい情報が無い事にクロノは気分が悪くなる。

（とりあえず家に戻って、敵戦力の分析を、皆を交えて行わなければな）

クロノはやや重い足取りながら、その場を後にした。

その後、クロノ達アースラスタッフが拠点に使ってるマンションに囑託魔道士であるフェイトとその使い魔のアルフ。現地の協力者、高町なのは。民間協力者のユーノ。

そしてアースラの艦長リンディとクロノ。そしてその補佐のエイミイが揃い、今回の事件で分かっている事を話しあっていた。

一時的に不穏な空気になるが、リンディの機転もあり場の雰囲気は険悪にはならなかった。

「つまり、今回の事件は闇の書の主を捕まえればいいんだろ？」

アルフの単純な回答になのはとフェイト以外の全員が、苦い表情

を浮かべた。

「本来ならそうなんだが、正直？ハンター？を捕まえるには僕とクロノ。それになのはとフェイトにアルフの五人がかりでないと正直厳しいと思うな」

クロノのかなり弱気な発言になのは達三人は驚愕した。

「え！？？ハンター？さんってそんなに強いのか？」

「それはいくらなんでも言いすぎだよ、クロノ。いくらクロノを倒したからって」

なのは、フェイトは異論を唱えるが、クロノ達は渋い顔を見せる。

「？ハンター？彼女は強い。フェイト並みの速度にベルカ騎士並みの接近技能。それだけでもミッドの魔道士では苦戦は確実だ。それに彼女の槍から放たれる粒子は、攻撃に防御もこなす未知の魔法。そして何より彼女は敵を倒すことに躊躇いが無い」

クロノは思い出したように顔をしかめる。

「正直な話、落とされる瞬間、見た彼女を僕は恐怖している。彼女の顔はまるで悪魔のように見えたよ」

クロノの言葉に無言で頷くユーノ。彼女と対峙しなければこの恐怖は理解できない。

「そ、それならロングレンジからの攻撃は？接近タイプの魔道士なら遠距離はそんなに得意じゃない」

フェイトの意見にエイミイが渋い顔でデータを表示した。

「それがそうでも無いみたい。彼女、遠距離から今日の結界を打ち向いたんだよ。単純な威力ならなのはちゃんのスターライトクラスはあるね。その事も踏まえて考えると彼女は間違いなく、魔道士ランクSは確実だね」

その言葉になのは達は顔が青くなる。つまり？ハンター？は近接戦闘では難敵。しかも遠距離攻撃も持つ万能型のSランク魔道士。

AAAランク魔道士である、なのはやフェイトでも手に余る相手だ。

「そうね。基本的には？ハンター？との単独での戦闘になったら迷

わず撤退して、二人以上の場合には臨機応変に対応というのが基本方針かしら」

リンディが今後の基本方針を言うと、全員が頷きその場は解散となった。

「はぐなんだか大変な事になっちゃったね」

帰宅中、なのはは思わずため息をこぼした。

「うん。そうだね」

フェレットモードのユーノもなのはに同意する。

なにせ今後闇の書に関わるとなると、必然的に？ハンター？と関わる事となる。

？ハンター？がとんでもない実力者なのは、話だけでも十分理解できる。そんな相手と戦う事を考えれば溜息くらい出るだろう。

「それにしても？ハンター？さんて凄いなだね。映像で見たけど、私達と同じ年くらいなのに……」

なのはは思う。同い年くらいの女の子なら、もしかしたら、戦わずにお話を聞いてくれるかもしれない。と、考えていた。

(そうだよ。最初から戦う事ばかり考えてちゃいけない。お話して少しでも？ハンター？さんを説得できれば、ヴィータちゃん達、守護騎士さん達とも戦わなくて済むかもしれない)

なのははそう決心すると、次ハンターと接触するチャンスがあったら、真っ先にお話をしようと思い決めた。

ちょうどその時、なのはの携帯からメールの着信音が響いた。

メールを見るとすずかからの画像メールだ。

「なのは、誰から？」

「すずかちゃんからだよ。今、すずかちゃんの家にお友達がお泊まりに来てるんだって。ほら、八神はやてちゃんと花城摩理ちゃんだつて」

なのはは画像をユーノにも見せる。

そこにはさすがかと車椅子に座った少女はやてと、やさしげに微笑む摩理の姿が映し出されていた。

第九話 摩理となのは

広大な砂漠が広がる無人世界。そこで摩理とシグナムは巨大なミズモドキを相手に戦っていた。

もちろん目的は蒐集なのだが、倒すだけならそう苦戦する相手ではないが、あくまで弱らせるとなると、シグナムと摩理の二人でもそれなりに苦戦する。

「摩理大丈夫か？」

「ええ。けど面倒ね。下手に力を強くすると簡単に殺せてしまっわ。手加減しながらの魔法生物の狩りはいつも気を使っわ」

摩理は愚痴をこぼした。かつての摩理の狩りは手加減など不要だったし、魔道士は大抵バリアジャケットを身につけているので、手加減も簡単だが、魔法生物には繊細な手加減必要となる。

摩理はその手加減がいまいち苦手だった。

「ぼやくな。これだけの獲物だ、魔道士ほどではないが、それなりのページにはなる」

「ええ。そうね」

摩理はそう言うところをアリスを構えなおしたが、瞬間自分たちの頭上から強力な魔力を二つ感知した。

「サンダーレイジ」

「アクセルシューター」

桜色の魔力弾と黄金の雷がミズモドキを一撃で倒した。

「……………」

摩理とシグナムは無言で突然の乱入者を睨みつける。

「……………」

睨まれた二人の少女、なのはとフェイトは妙に居心地の悪い気分になった。

「あ、あのお邪魔でしたか？」

それでも勇気を持って訊ねるフェイトだが、

「ああ。おかげで蒐集対象を潰された」

「ええ、そうね。私達の苦勞を一瞬で無駄にされたわ」

二人の容赦ない言葉に場の雰囲気、ますます気まずくなる。

「まあ、お前達管理局がここに来たという事は、私達を捕えに来たのだから？なら前回の決着をつけよう。テストロッサ！」

シグナムはそう言うと、レヴァンティンを構える。それを見たフエイトも表情が先程までの子供の表情から魔道士の顔へと変わる。

「悪いが手出しは無用だ」

シグナムの言葉に摩理は苦笑した。

「構わないわ。なら私の相手はあの子ね」

摩理もアリスを構える。

合理的に考えれば、いかにしてこの状況を二対二から二対一に変えるかが重要だ。

だがシグナムはこの幼い魔道士との決闘を望んだ。

だから摩理もそのシグナム気持ちをくむと同時に、フエイトとの戦いを見守る事にした。それと摩理にも理解できないが、何故かフエイトはシグナムにも負けない強い子だという確信があった。

「さて、ではいくぞ！テストロッサ」

「はい、シグナム！」

二人は同時に空を疾走した。

「ふふふ、派手に始めたわね。それじゃあ、こっちも始めましょうか？管理局の魔道士さん？」

摩理はなのはへと視線を移した。だがなのははどういう訳か摩理と対峙しているのに戦意が無い。それどころか……

「レイジングハート、お願い」

『ハイマスター』

己のデバイスである杖を待機モードにした。

「?どういつつもり」

「あ、あの、?ハンター?さんどうしても闘わないといけないんですか?」

なのはの問いかけに、摩理は首をかしげた。

「?……貴方達は私達を捕えに来たんでしょ?私達は捕まるつもりも、蒐集を止めるつもりもないわ。なら闘わない。という選択以外ないわ」

「でも、話し合えばきつと戦う以外の解決もあるかもしれません!」
なのはの真剣な声に摩理は驚いた。

(この子、本気なのかしら?本気で話し合いでどうにかなると思っているの?)

摩理は疑ったが、なのはの真剣で真直ぐな表情が、亜梨子と重なる。

(ふふふ、この世界はほんとに困るわ。亜梨子と同じ目をする子が二人もいるなんて)

摩理はそう思うと、構えていたアリスを下げる。あの目をする子を傷つけるという事は、親友である亜梨子を、家族であるはやてを傷つけるような気がしたからだ。

「分かったわ」

「ほ、ホントですか!」

「ええ。騙し討ちする趣味は無いわ。でもここだと二人の流れ弾に巻き込まれかねないわね。そうね、あの岩場に移動しましょ」

摩理は先導するように岩場へと移動を始めた。なのはも摩理の後を追うように続く。

摩理は岩場に辿り着くと手頃な岩に腰をおろし、腰に下げたポーチからミネラルウォーターを取り出し一気にのどに流し込む。

「貴方も飲む?」

「え、いいいいです」

正直なのはは摩理の行動に少し戸惑っていた。話しをしたと言つても、あの？ハンター？が簡単に受け入れるとは正直思っていなかった。しかも今の彼女はどう見ても、先程まで対峙していた格上の魔道士には見えなかった。

その無防備な姿になのはは、もしかしたら仲良くなれるかもと思うほどに、今の彼女は普通だった。

「それで？何を話したいの？管理局の魔道士さん」

「あ、なのはです。高町なのは」

「そう。で？高町さんは私と何を話したいの？」

「……？ハンター？さんは如何して闇の書の蒐集をしてるんですか？」

「そうね。一言でいえば、自分の為ね」

摩理は少しだけ皮肉げに嗤った。

「自分の為？じゃあ闇の書を完成させて、すごい力が欲しいんですか？」

「力？そんなモノ要らないわ。私が欲しいのは、もっとささやかなモノよ」

「？何ですか、それ」

「かんに説明すれば、闇の書を完成させることで救われる家族がいる。だから闇の書を完成させるそれだけよ」

「でも、それならなんで自分の為になるんですか！？助けたい人の為じゃないんですか！？」

なのはの驚いた声に摩理は自嘲の笑みを浮かべる。

「私はね、自分の行動の責任を他人に押し付けるつもりは無いわ。私は自分のワガママで他人を傷つける事を選んだわ。それを他人の所為にするつもりは無いわ。まして責任を押し付けもしない」

摩理の断言する口調に、なのはは何も言えなかった。

「貴方達からすれば私の行動は犯罪でしょうね。でも、私にとってはそんな事どうでもいいわ。邪魔するなら倒す。今までだってずっ

とそうして来たわ」

摩理はあえて殺すとは言わなかった。摩理はすでに何人も人間を死ぬより辛い目にあわせて来たのだ。そんな自分が今更他人の命を奪う事に躊躇いなどありはしないが、それをなのはに言う必要は無い。

「それで？私の理由を聞いたあなたはどうするの？」

「……………その前に一つ聞いていいですか？」

摩理は無言で頷く。

「もしも、闇の書が？ハンター？さんの望みを叶えられなかったら、どうするんですか？もし危険な物で逆に？ハンター？さんの家族を危険にさらす物なら……………」

「簡単よ。闇の書を止める。そして別の方法を探すわ。私はね、もう二度と手放したくないの、あの暖かい場所を」

摩理の意思になのは何も言えなかった。摩理の意思は何者にも曲げられない。迷い無い声になのは初めて同世代の少女である摩理に尊敬と憧れを感じた。

その瞬間、異変が起きた。

摩理のデバイスであるアリスが不規則に光りだした。

「え？どうしたんですか？」

「……………どうやら話はこちらまでね。高町さん一緒に来て。シグナム達に何かあったみたいだわ」

摩理はアリスを手にする、シグナム達が闘っているであろう場所に向かって跳躍した。なのはも慌ててそのあとを追い、驚くべき光景を目にする。

そこには仮面の男によってリンカーコアを抜き取られていたフェイトの姿があった。

第九話 摩理となのは（後書き）

え、次回は摩理さんの本気と原作破壊を実施します。どういう展開になるかは少しだけ楽しみにしてください。

第十話 小さなバグ

リンカーコアを抜き取られたフェイトを見た摩理は、何故か仮面の男に対して無性に怒りを感じていた。

何故怒りを感じるのかまでは理解できなかったが、摩理は元々この仮面の男の事を不審に思っていた。

摩理はこの仮面の男をここで倒すことを決めた。

「シグナムさん！フェイトを連れて下がって！」

摩理はそう言うと、フェイトを拘束する仮面の男の顔に向けて、アリスで突きを放つ。

仮面の男はフェイトをあっさりと手放し、摩理の突きをかわす。

解放されたフェイトをシグナムが確保した瞬間、仮面の男との戦闘に意識を集中する。摩理の意思に反応したのだろ。摩理の体に浮かぶ銀色の模様が腕や足だけでなく、頬や瞳も浸食する。

そしては放たれる圧倒的なプレッシャーにその場にいる全員が硬直する。

？ハンター？花城摩理の本気だった。

そして摩理の思考も昔に戻る。かつて多くの虫憑きを狩った冷酷無慈悲な？ハンター？に。

この世界ではやてに出会ってから摩理は、無意識または意識的に？ハンター？としての自分を抑えていた。それは蒐集の時も変わらない。

蒐集はあくまで殺さずだ。？ハンター？としての感覚では全て殺してしまう。だから摩理はそれを抑えた。

だが今回は違う。目の前にいるのは明確な？敵？だ。故に摩理は出し惜しみなどしない。全てを用いて目の前の男を？狩る？

「……………？ハンター？私はあくまで争うつもりは無い。むしろ蒐集を手助けしている。それなのに何故刃を向ける？」

仮面の男は無駄な戦闘をしたくないのだろう。摩理にそう語りか

けたが、摩理はマフラーで隠れた口元に冷酷な笑みを浮かべると、問答無用で仮面の男にアリスを振り下ろす。

今までとは比べ物ならない速さで繰り出される槍の一撃を仮面の男は回避するが、アリスから放たれる鱗粉の余波に絶句する。

放たれた鱗粉は砂漠に大きな穴をあけた。もし直撃していれば非殺傷指定でも確実に一撃で撃破される。

「なッ!？」

驚きの声を上げる仮面の男。だがそれはその光景を見ていたシグナムとなのも同じだろう。

摩理が強いのはシグナムもなのはも知っていた。だがここまで圧倒的な強さだとは知らなかった。

今も摩理は大地を駆け、空を縦横無尽に跳び回りながら、仮面の男を追い詰めていく。仮面の男は摩理の槍を防御、鱗粉を回避しかろうじて大きなダメージを防いでいるが、それも長くは続かない。なにせ摩理の攻撃は時間を追うごとに速く、鋭く、そして強大になつていった。

仮面の男こと、リーゼ・ロツテは今の状況に焦っていた。

奇襲により強大な魔力を持つフェイトを蒐集したまでは良かった。だが守護騎士の協力者？ハンター？を名乗る少女がこうもあからさまに襲ってくるとは予想外だった。

そもそも彼女達は？ハンター？をそれほど危険視していなかった。強い力を持つ事は知っていたが、それでも所詮九歳の子供。

自分達の邪魔できる存在ではないと思っていた。

だが違う。この子供は違うと。ロツテは認識した。

その瞳は冷酷で無慈悲、敵対した瞬間、その事を深く理解した。

ただの子供がこんな目をするはずが無い。この少女はきつと？戦闘？を経験している。

本当の命のやり取りに近い？戦闘？を。そして？戦闘？の中で多くの人を踏みつけて、きたのだろ。

(やばいよコイツ。本気で殺しにきてる)

ロツテは迫りくる恐怖に耐えながらも、摩理の攻撃に耐え続けた。だがそれも長く続かなかつた。今まで単調な攻撃ばかり繰り返していた摩理がアリスを手放し一気にロツテの間合いの内、肉弾戦の距離まで詰め寄り、魔力を込めた掌低をロツテの体に叩き込んだ。

「ぐッ!？」

とつさに防御したが、それでも威力を殺しきれず蹲るロツテ。

摩理が手をかざすと、アリスから触手が伸び、再び摩理の手に戻る。「ふふふ。同化型の武器は強化した武器だけじゃないわ。強化された肉体も立派な武器よ」

摩理はアリスをロツテのど元に突きつけ、

「謝っても許さないわよ」

摩理は残忍な笑みを浮かべながらロツテを見下ろしていた。

その時、ロツテの恐怖は限界を超えた。震える手を体をどうにか表に出さないようにするのが限界だった。

「さて、終わりよ」

「お前がな」

摩理がアリスでロツテの喉を貫こうとした時、背後から声が響くと同時に、摩理、戦闘に巻き込まれないように距離を取っていたのは、フェイトを抱えていたシグナムが同時にバインドで動きを拘束された。

「大丈夫か？」

背後から現れたのは、先程まで摩理と戦っていた仮面の男と同じ姿の男だ。

「お前は調子に乗りすぎだ。ここで消えろ」

新たに現れた男は摩理を殺そうと手に魔力を集める。

だが摩理はその男の行為を嘲笑った。

「ふふふ。この程度で勝ったつもり？だとしたら貴方達、魔道士は

よほど間抜けなのね。私が貴方の存在に気付いていないと思った？
魔力を持つ存在はアリスが教えてくれるわ。だから待っていたの貴
方がここまで近寄るのを！」

摩理がそう言った瞬間、アリスから大量の鱗粉が吹き荒れる。

鱗粉は近くにいた仮面の男達だけでなく、離れたシグナムなのは
をも包み込む。

鱗粉に包まれた瞬間、なのはシグナムを拘束するバインドがゆっ
くりと拘束力を失い、砕けた。

「これは一体？」

「何、これ」

シグナム、なのはも困惑した声を上げる。

『マスターこの粒子はAMFの一種です』

「AMFってなに？」

『魔力結合を阻害するフィールド魔法の事です』

レイジングハートの解析に、なのはは勿論、シグナム、仮面の男
達も驚く。

「これ、AMFって言われているのね。この世界では。私は領域支
配と呼んでいるけど。まあこれで貴方達も終わり……？」

そこで摩理は表情を変えた。仮面の男達が苦しげにしていた。摩
理のこの領域支配は相手にダメージを与える鱗粉とはまるで種類が
違う鱗粉だ。

この鱗粉を体に浴びたところでダメージは全く与えられない。

不思議そうに眺めていた摩理の目の前で、仮面の男達に変化が起
こった。

仮面の男達が猫っぱい耳のはえた女性に変化した。

「……………これはさすがに予想外ね。まさか変身魔法で姿を変えた
守護獣だったなんてね。で、誰の差し金かしら？」

摩理は再びアリスをロツテに突きつける。

「……………素直に話せば命は助けるとか言うつもりか？」

ロツテは内心の怯えを隠すようにあえて敵意をむき出しに言うが、

摩理はそんなロツテには興味無く。

「別にあなたが話さないなら、もう一人に聞けばいいわ。貴方を殺した後でね」

摩理は冷徹に言いきると、もう一人の仮面の男こと、リーゼアリアは摩理を止めようと飛びかかろうとするが、フェイトを抱えていたはずのシグナムが間に入った。

「悪いがこれ以上傍観するつもりは無い！テストロツサは高町に任せたからな。さて守護獣よ、同じ魔法が使えぬ同士だが、まさか騎士を相手に勝てるつもりではないだろうな？」

シグナムはレヴァンティンを構えながらアリアを牽制する。

周囲を見ればなのはもフェイトを守るようにレイジングハートを構えていた。

「ちッ！」

アリアは状況の不利さに思わず舌打ちをする。

もともとアリアは遠距離線を専門としていた。このAMFの状況下では不利。しかも相手は魔道士で無く近接戦闘特化の騎士だ。

勝てる要素が無い。

アリアは少しだけ考え、

「分かった降参だ。このAMFを解いて」

「残念だけどそれは出来ないわ。もう少ししたら構わないけどね」

摩理はそう言うと、ロツテを思い切り殴りつけ気絶させた。

「シグナムさんはそっちの彼女を監視して」

摩理はそう言うと、なのはとフェイトに近づく。

「フェイトの様子は？」

「え？あ、リンカーコアを抜かれているから、衰弱がひどいよ、早く治療しないと」

なのはが悲しげに言うと、摩理は少しだけ考え、

「分かったわ。他の守護騎士達もすぐ来るからフェイトの治療をしてもらうから、安心して」

と微笑んだ。

その場にいる全員が驚きを浮かべる。

「確かに有効だが、いいのか？ 背後関係を調べてからの方が」

「そんな余裕私達にあるの？ 一刻も早く闇の書を完成させるためには仕方ないわ」

ザフィーラの意見を摩理は却下すると、闇の書を手にロツテとアリアから蒐集を開始した。

途中なのはとアルフが摩理を止めようとするが、守護騎士三人を相手に出来ないと言ったようだ。

「蒐集完了ね。思わぬ収穫もあったし帰りま」

そこで摩理の言葉は途切れた。突然全員目の前に巨大な転移魔法陣が現れ、中から数十人の武装局員とクロノが現れた。

「なのは、アルフ、フェイト助けに来たぞ！……！！？」

威勢よく助けに来たクロノだが、その場のカオス具合に言葉を失う。

まず何故かフェイトは守護騎士の一人に治療されているし、なのはもアルフも負けて捕まっている雰囲気では無い。そして何より……

……

「なんでアリアとロツテがここにいる！？」

クロノの驚きの声に全員が反応する。

「貴様！ この二人が何者なのか知っているのか！？」

シグナムはレヴァンティンを構えながらクロノに問いたです。

「あ、ああ。管理局員で僕の師匠だ」

クロノ言葉に守護騎士となのはとアルフは驚くが、摩理だけは難しい表情を浮かべた。

「その事も含め、詳しい話を聞きたい。全員武装を解除してくれ！」

クロノはやや困惑な声で全員の武装解除を促すが、摩理はアリスを構え、

「残念だけどそれは出来なくなつたわ。詳しい事情とはここに倒れている二人に聞いて！ それと、高町さんとフェイト、そしてアルフを貴方達に渡す訳にはいかなくなつたわ」

摩理は一方的にそう言うと、アリスを使いクロノ達を中心とした領域を支配した。

「なっ！？何だこれは！？魔法が使えない！？」

慌てふためくクロノ達を摩理は一瞥すると、守護騎士達の下に向かった。

「摩理どういっつもりだ？」

「詳しい話は家でするわ。今は脱出が優先よ。高町さん達もいいわね」

なのはもアルフも何か言いたげだったが、摩理の勢いと治療中のフェイトの事もあり二人は摩理について行くことにした。

全員が転移魔法陣の光に包まれる、そしてその場には誰もいなかった。

その時は誰も気づかなかった。摩理のこの行動がこの事件を変えるバグとなる事を。

第十一話 真実 前編

八神家の食卓は基本的には賑やかだが、その日は何とも言えない気まずい雰囲気があった。

原因は摩理が連れ帰って来た三人。正確にはフェイトは摩理の部屋で休んでいるので、実際には二人だ。

なのはとアルフの所為だろ。二人はどこか困惑と気まずさで居心地が悪そうだ。守護騎士四人も困惑と警戒で食事を楽しむ余裕はない。

はやてもそんな雰囲気であまり食事を楽しむ余裕が無い。本来ならお客さんが来たら全力で歓迎するはやてだが、この状況でなにを言っても盛大にスベリそうなのではやても無言だ。

「?どうしたのみんな?食事の時は騒がしいくらいなのに、今日はやけに大人しいわね」

唯一リラックスしているのが摩理だけだった。不思議そうに尋ねる摩理に全員が「お前が原因だろ」的な視線を向けるが、摩理は気付かないのだろう。不思議そうにするだけだ。

「あーも、我慢できひん!摩理!一体どうゆう事や!いきなりなのはちゃんとフェイトちゃんを連れてきて、しかもシグナム達は妙に警戒心丸出し!しかもアルフさんみたいな犬耳な女の人まで連れてきて!詳しく事情を説明し!」

「いいわよ」

はやての激怒に、摩理はノンタイムで返答する。あっさりとした摩理にはやても勢いをそがれる。

「ただしご飯を食べ終わってからね。長い話になるから……」

はやては丸めこまれたような気がして納得がいかなかったが、摩理を信じて食事を再開した。

「さてと、まずはやて。高町さんとフェイト。そしてアルフさん。三人は管理局の魔道士よ」

「へ？なのはちゃん達が？ホント？」

「うん。そうだよ」

はやてが思わず訊ねると、なのはも認める。

「そして、私達を捕まえる為に何度か戦ったわ」

「は？捕まえる？戦う？なんでや！」

「答えは、はやてなら分かるでしょ？私と守護騎士が管理局に追われる理由を」

摩理の問いかけにはやては、しばし無言だった。シグナム達もその無言がひどく苦しかった。

「……蒐集してたんか？」

出来ればハズして欲しい。そんな願いが込められたはやての問いを摩理は、

「ええ」

あっさりと認めた。

「なんでや！なんでそんな事したんや！！私はそんな事みんなにさせとくない。皆は家族や！ここで平和に暮らす。蒐集はしない。そう約束したやろ！」

はやての言葉に、シグナムは唇を噛み、ヴィータは顔をうつむき、シヤマルは苦しそうに顔をこわばらせ、ザフィーラも苦しそうに頭を下げた。

「ええ、そうよ。でもね、はやて。私達はあなたに生きて欲しいから蒐集を始めたのよ」

「！？」

「あなたの病気。闇の書が原因らしいわ。完成させれば、最低病気の進行は止まるらしいわ」

「でも、そんな……」

はやての瞳に涙が浮かぶ、その様子に守護騎士達は罪悪感が押し

寄せてくる。

「それに勘違いしないで。これは私達のワガママよ。どれだけ傷ついても、恨まれても、はやてに悲しい思いをさせても、それでもあなたに生きて欲しい」

「……………摩理はズルイな。そんな言われたら、怒れへん」

はやては涙ながらに笑みを浮かべた。その様子に守護騎士達は安堵し、見守っていたのは達もどこか嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「？ハンター？さんが助けたい家族って、はやてちゃんのことだったんですね」

「ええ、そうよ」

「？ハンター？？摩理、なのはちゃんにそんな風に呼ばれとるんか」
落ちて着いたのだろう。はやてが不思議そうに訊ねた。

「さすがに本名を名乗れないわ。だから昔呼ばれていた通り名を名乗っただけ」

「ずいぶんと物騒な通り名で呼ばれたんやなー摩理は」
はやての正直な感想に、摩理は苦笑した。

昔の事とはいえ、あの頃の摩理は他者からハンターと呼ばれる程の？虫？を狩っていたのだ。おもに自分のワガママで。

その事を思い出すと、自然と胸の奥が痛む。そんな自分が偽名とは言え自ら？ハンター？を名乗る日が来るとは、当時の自分では全く想像さえできなかつただろう。

ましてや誰かを救うための戦いを自分の様な人間がするなど、考えられなかつたはずだ。

「その話はまた今度ね。それより今後の事を考えましょ。当面、管理局には二つの戦力があると考えた方がいいわ」

「二つ？どういう事だ摩理」

シグナムが不思議そうに訊ねる。他の面々も同じようだ。

「まず一つが高町さん達が行動を共にしていた、闇の書の完成阻止派。そしてロツテとアリアだったかしら？彼女達闇の書を完成させ何かに利用しようと考える派閥の二つよ」

「最初のはともかく二つ目はありえねーよ！闇の書は完成させたら主以外使えねーんだから」

グイータの否定の言葉に摩理は苦笑した。

「そうなの？でも可能性としては高いわ。なにも闇の書自体を直接利用できないのなら、はやてを利用するつもりかもしれないし」

「いや、それは無い。完成した闇の書の主に洗脳や脅迫などの手段は無意味だ」

「……ずいぶん便利なね闇の書って。でもザフィーラ、それでもよ。彼らがこちらを支援するような行動をしたという事は、彼らが完成した闇の書に対して何らかの行動をする可能性は高いわ。なら私達は完成後も気を抜く事は出来ないわ」

「……確かにそうだな。すまん摩理。どうやら我らは樂觀視しすぎたようだ」

「構わないわ」

摩理は短くそう言うと、アルフが疑問を口にした。

「でもさ、クロノいわく闇の書って完成後は破壊以外に力行使できないうって言ってたけど、それでははやてを助けられるのかい？」

「！？なんですって！それ本当なの？」

驚く摩理にグイータは猛然と反論する。

「そんな訳無いだろ！今までの闇の書の主は完成後………あ、あれ、思い出せない」

「そんな馬鹿な。なぜ我々は完成後の闇の書に関する記憶が無い！」

「どうして？そんな」

「どう言う事だ」

戸惑う守護騎士四人に他の四人も戸惑う。

「どう言う事や？なんでシグナム達が完成後の闇の書について知らないんや？」

「はやての疑問はもつともね。そうね、はやて。闇の書に今までの記録みたいなものは保存されていないのかしら？」

「分からねーまあとりあえず調べてみよか」

予想外の事に一瞬驚くが、はやては闇の書のマスターだ。闇の書に問いかければ何かしらの情報が出る。摩理はそう思い提案した。はやても闇の書の不可思議な部分が気になるので、さっそく調べようと闇の書に声をかけようとした時、

「主ははやて。その前にお伝えしたい事があります」

突然シグナムが割って入った。

「どうしたんや？」

「いえ、実は蒐集以外にも私達は主ははやてに隠し事をしていました」

「?!？」

はやては勿論、摩理も驚く。

「どう言う事や？」

「実は闇の書には我らヴォルケンリッターとは別に、闇の書の管理をつかさどる管理者が存在がします」

「なんやて!？」

「そうなの？」

初めての話に驚くはやて。今まで蒐集を共にしてきた摩理も、そんな話は今まで誰も教えてくらなかったので摩理も驚いていた。

「はい。ですが管理者を起動するには蒐集が400頁を超える事と、主ははやての許可が必要です。主ははやては蒐集を望んではいなかったものであえて伏せていました」

シグナムの説明に摩理は納得した。はやての性格なら管理者の存在を知ったら、きつと外に出してあげたいと思うだろう。

だがその為には頁を400も集めなければならぬ。

そのことで、きつとははやてが心を痛めると危惧してに判断だ。摩理がシグナムの立場でもきつとそうしただろう。

「おし!なら、その子呼びだそ。闇の書お願い」

はやての願いに反応するように、闇の書から白い光が溢れ一人の女性へと変化する。白銀の髪に赤い瞳の女性へと。

「初めまして主ははやて。闇の書の管理を務める物です」

「?名前は何んて言うんや？」

「私に名前はありますか」

「な！？それはあかんよ！よし、これも主のお仕事や。そやな……」

……うん。ラインフォース！あなたの名前は祝福の風・ラインフォースや！」

「祝福の風・リインフォース…… 私の名前…… ありがとうございます。主はやて。わたしにこのような綺麗な名を授けてくれて」
リインフォースは涙を浮かべながら、はやてに礼を告げる。

「え？や、そんな泣かんでも…… 私は名前が無いなんて寂しいだろなーおもっただけやし……」

「いえ、今までの主の誰もが私達を道具としてしか扱わなかったのです。管理者、いえリインフォースの気持ちは私にも理解できます」
シグナムの言葉にシャル、ザフィーラも頷く。だが何故かヴィータだけが難しい表情を浮かべていた。

「そうか。なら今日からリインフォースも八神家の一員や！よろしくな」

「はい。主はやて」
嬉しそうなリインフォースに自然と笑みを浮かべるのは。アルフも何故か嬉しげだ。

「……いい雰囲気のところ申し訳ないけど、リインフォース。あなたに聞きたい事があるわ。聞かせてくれる？」

摩理はあえて訊ねた。本来なら出会う事の出来なかった二人の間を大切にしたいが、現状では二の次だ。

リインフォースも理解しているのだろう、表情を改めて摩理の質問に答えた。

「管理局の言うとおり、闇の書は完成とほぼ同時に暴走を起こします。主を吸収し消滅するまで破壊をまき散らし続けます」

「……！？」

リインフォースの告白に驚いたのは守護騎士四人だ。だがある意味当然だろう。なにしろ自分達の行為が、主を救うどころか、逆に不幸に叩き落とすに等しい行為だと知らされれば……

「何故そんな事に？」

「もとは闇の書は、夜天の書といわれる魔道書でしたが、度重なる改編により能力の一部が暴走を始め今の形に変化しました」

「暴走を止める手段はあるのかしら？」

「一応は存在します。主はやてが取り込まれた闇の書の中で主として闇の書に干渉すれば、もしかしたら暴走する部分だけを取り除くことは可能かもしれません」

「つまり完成後の闇の書の暴走を抑えながら、はやてが暴走部分を切り離せば、最悪はやてやあなた達は問題が無いのね」

「……………はい。ただ切り離れた暴走部分は膨大な魔力と、闇の書の転生機能を応用した再生能力を保有します。あれを滅ぼすのは困難です」

リインフォースの説明に全員に暗い表情が浮かぶ。はやてが暴走部分を切り離せば、丸く収まると一瞬喜びかけたが、暴走部分がそこまで厄介な特性を秘めているとなると、そう上手くいかないかもしれない。

最悪せつかく助けられたはやてが、暴走部分に殺されてしまう可能性もある。

「……………リインフォース一つ聞いていいかしら？」

「ええ。構いません摩理」

「その暴走部分。もしかして？不死？なのかしら？」

「？不死？？いえ、そんな事はありません。困難ではあっても所詮は夜天の書の一部。破壊は可能です」

「そう、なら問題は無いわ。もし？不死？だと言われても、私ならどうにか出来る筈だから」

摩理の妙に自信のある口ぶりになのはが思わず訊いた。

「あの？ハンター？さん。何か解決策でもあるんですか？」

「そんな具体的な物ではないけど。昔ね、ある人に言われたの。『君なら？不死？を殺せる』だからきつと暴走部分も私ならきつと破壊できるわ」

「？不死？を殺す？なんか矛盾してない？」

疑いの眼差しを向けるアルフ。他の皆も半信半疑だ。その様子に摩理は苦笑する。

「不死？を殺す力。矛盾する力。」

確かに今思えば何と矛盾し、皮肉な力を授けられたと思うが、実際に摩理にはそれがある。なにより摩理はイレギュラーなバグだ。

なによりなのは達は勿論、守護騎士はやてさえも知らない。？花城摩理？はここに存在すること自体、在りえない存在だという事を。

ただ自分の言っている事を信じてもらうには、実際力を使って見せる以外ないだろう。

「分かったわ。実際やってみましょう。高町さん、魔力弾を一つ作ってもらえるかしら。静止状態の物を」

「え？あ、ハイ」

なのはは集中し桜色の魔力弾を作りだした。

摩理はそれを確認すると、アリスを起動させ、ある能力を発動させる。

銀色の鱗粉がリビングを包む。銀色の鱗粉に、なのはとアルフ、守護騎士達も警戒の眼差しを向ける。

摩理が今まで使った鱗粉は攻撃の性のある鱗粉に、魔力の結合を阻害する鱗粉。そのどちらもがこんな室内で使う能力で無い事はやてとリンフォース以外の全員が理解している。

実際はやては呑気に、「綺麗やなー」「そうですね」と、リンフォースと摩理の鱗粉に見とれていた。

「……………摩理、この鱗粉は一体何だ？」

シグナムは不審な眼差しで訊ねる。摩理の鱗粉が攻撃性の物なら、この場にいる全員がダメージを受けるし、もし魔力結合の阻害の鱗粉ならなのはの魔力弾はその存在を保てない。

だがこの鱗粉は違った。心地いいやさしさ、そして安堵感をもたらした。

「そうね。高町さん、あなたの魔力弾を操作してみて」

「え、あ、はい。……………あ、あれ？」

魔力弾を操作しようとしたのはは、困惑の声を上げる。最初は手さえかざさなかつたのはだが、今は手をかざし、全力全開で操作しようとしているが、魔力弾は一切動かない。

「一体何をしたんだ、摩理」

ザフィーラの問いに摩理は何でも無いように答えた。

「眠らせただけよ」

「眠らせたー？なにをだよ」

「魔力を」

「……………はあ？摩理、いくらなんでも魔力が眠るわけねーだろ」

グイータの意見は正論なのだろう。はやて以外の全員が頷く。

「そう言われても困るわ。これが私の本当の能力。魔力を、意思を深い眠りへといざなう力。これを用いれば暴走部分の再生能力も防げるわ」

摩理の言葉を誰もが信じられない表情で聞いた。

それだけ摩理の言う魔力を眠らせるという行為が非常識なのだ。

「ちなみに今のこれは、最低の力で発動させているわ。全力で展開したらあなた達も全員眠ってしまうわ」

摩理はそう言うと、鱗粉を解除する。と同時になのはの魔力弾はなのはの思い道理に動き出した。

「……………つまりこれで暴走部分を眠らせ、そのスキに破壊すると？」

「ええ。でも暴走部分を見ない事には、どの程度の出力で能力を展開すればいいかわからないから、それはその場で臨機応変に行くしかないわ」

摩理の能力がもし暴走部分に効果があれば、守護騎士四人に摩理の五人だけで闇の書の呪いを解ける可能性がある。

あくまで効果があればの話だ。もし効果が無かった場合、最悪たった五人で世界を滅ぼしうる存在と戦う事になる。さすがにそんな事態は避けたい。

出来ればもう数人強力な魔道士がいれば、シグナム達も摩理の提案を受け入れたらう。

「さすがに不確定要素が多い。せめてあと数人優れた魔道士の手助けが必要だ」

「なら私も手伝います！私もはやてちゃんを助けたいです！！」
「私も手伝います」

なのはの声に同調するように、寝ているはずのフェイトがいつの間にかリビングの入口に来ていた。

「フェイトちゃん！起きて大丈夫なの」

「うん。話しは念話で摩理から聞かせてもらったから大体理解してる。はやてを助ける為に私にも手伝わせて」

「フェイトが手伝うなら、当然あたしも手伝うよ」

「ありがとな、なのはちゃん、フェイトちゃん、アルフさん」

涙を浮かべながら感謝を告げるはやて。

「私からもありがとう。高町さん、フェイト、アルフさん」

「あの？ハンター？さん。私の事はなのはって呼んで」

「なら私の事も摩理って呼んで。なのは」

「うん。摩理ちゃん」

なのは、フェイト、アルフの参戦で戦力的にはどうにかなる算段が見ついたがまだ二つ問題が存在した。

「管理局と蒐集か……………」

そうこれからやる事は管理局にとっては防ぎたい事態だ。当然協力はしてもらえないと考えられる。

さらに管理局には闇の書を利用しようと考ええる勢力が存在する以上、もし協力が受け入れられても土壇場で介入されればせっかくの作戦が台無しにされる可能性が高い。なので今回管理局には協力を

求めない方針に決まったが、そうになると蒐集が困難になる。

いくらなのは達が協力してくれるといっても、さすがに蒐集まで手伝ってもらうつもりは無かった。

「シヤマル、闇の書はあと何ページくらいなん」

「えっと、ちよつと待ってね。今回予想外の収穫もあつたからまだ確認してないけど、

えっと……今600ページね」

「あと、66ページか。残り少ないとはいえ、少し多いな。今は主はやての体もそうだが、テストロッサ達の事もある。そう時間をかけられん」

シグナムの意見。これこそが皆の不安要素だ。

はやての体はまだ持つだろうが、現状時間をかければ確実に、管理局はこちらを補足するだろう。

あの使い魔二人が闇の書を狙っていたのなら、確実に主であるはやての居場所を把握している。

そんな中で蒐集に時間をかけるのは愚策だ。

また戦力であるフェイトの回復は数日程度で済む。その数日で86頁を埋めるには、魔力を持った動物では無く、魔道士を狙うしかない。

だがこの状況で魔道士を狙うには不確定要素が多い。

「……………仕方が無いわね。奥の手を使うわ」

「！摩理、何かいい案があるのか！？」

飛びつくシグナム。

「簡単よ、完全完成ギリギリの魔力を私から蒐集すればいいわ」

それははやて以外の全員が心のどこかで考えていた事だ。摩理の魔力量は同化していない状態でも、なのはと同等か少し上くらいはある。

同化をすれば確実にこの中で一番の魔力量を誇る。

シグナムとなのはは知っているが、摩理がロツテとアリアと戦っていた時の魔力量は大雑把に見てもSSSランクは確実にある。

それだけの魔力があれば、闇の書を完成させる事は出来る。

だが同時に高いリスクを負う事になる。最大戦力であり、肝心かなめの摩理から蒐集する事による戦力ダウン。

そして摩理の魔力資質を蒐集する事によって、闇の書が摩理の魔法を習得し、摩理の切り札に対抗する手段を得る可能性だ。

「リスクは承知よ。でも今はそれ以外に闇の書の完成手段は無いわ」
結局摩理に押し切られる形で、摩理のプランが実行される事となった。

摩理とフェイトの回復を考え、五日後闇の書の完成を実行する事となる。

だが摩理の魔力を蒐集した事により、誰にも予想のつかない結末が訪れる事になるとはこのときは誰も知らない。

第十二話 真実

後編（後書き）

後編のくせに、ずいぶんと間が空いてしまいました。反省です。さて次回はVS闇の書になります。原作とは違う展開を目指して頑張っていきます。

第十二話 異変

五日後、八神家一同となのは達は摩理と守護騎士が初めて蒐集を行つた無人世界に来ていた。

この五日間で摩理とフェイトはシャマルの回復魔法の力を借り、ほぼリンカーコアを回復させる事が出来た。

それでもん万全とはいえない状況だが、今はそんな事を言える状況ではない。

なのは家に友達の家泊まると言つて、この五日間過ごしたがその言い訳も限界。管理局も搜索している現状では、今この瞬間以外に計画実行のチャンスは無い。

皆がこれから起きる戦いに緊張する中、摩理が最後の蒐集対象を捕えてきた。

「ん〜この目で見てもいまいち信じられへん。摩理ってホンマでたらめやな〜」

はやては先程の摩理の戦闘光景を思い出す。

摩理は同化を行うと、素手で虎に似た生き物を一撃でノックダウン。

その光景に見慣れた守護騎士達はともかく、なのはやフェイト、アルフも啞然としていた。

「はやて。摩理の出鱈目さはシャレになんねーよ。この程度で驚いていたら一緒に戦えねえし」

もはや見慣れたヴィータは溜息交じりに言う。

「にはははは。摩理ちゃん凄い」

「ホントに凄いな摩理は。私も魔法無しであれば出来ないよ」

「全く。て言うか本当に出鱈目だね」

なのは、フェイト、アルフも呆れたように摩理を見る。

「別にこの程度は大したことは無いわ。それよりみんな自分の役割は頭に叩き込んであるわね？」

全員が頷く。摩理の作戦では暴走した闇の書を相対する場合、前衛をシグナムと摩理が務め、中衛がヴィータ、フェイト、アルフが務める。

後衛が、なのは、シャマル。そして防御がザファイラの布陣だ。

そしてこの戦いはまだ前哨戦。この後の暴走プログラムとの戦いも控える為、カートリッジと魔力を消耗は極力抑える作戦が組まれた。

「この戦いはあくまで、はやてとリインフォースが暴走部分を切り離すまでの時間稼ぎ。無理はせず牽制と防御を中心に行くわ。みんなもいいわね」

摩理の言葉に全員が頷く。

「そしてはやて、リインフォース。貴方達二人がどれだけ早く作業を終えるかによって、今後の展開が大きく違うわ。あまり言いたくは無いですね、早く早く帰ってきてね」

「まかしとき！すぐ戻ってくるよ」

はやてはそう言うと、親指を立てて笑顔を向ける。

「皆もあまり無理をしないように」

リインフォースもそう言うとはやてと共に蒐集対象のそばに向かった。

最後の蒐集ははやてが自分の手で行う。はやてが最初に言い出した時は、全員あまりいい顔をしなかったが、はやての最後は自分の手できつちりと終わらせたいという言葉に全員が折れた。

「…………ごめんな。闇の書、蒐集！」

はやての言葉と同時に虎もどきからリンカーコアが抜き取られ、闇の書が完成する。

完成と同時に闇の書から光が漏れ、はやてとリインフォースを包み込む。

光が晴れそこにいたのは、リインフォースに似た誰かだ。

漆黒の衣をまとい、こちらを刺すような視線でこちらを見るリインフォースモドキ。

「さて、行くわよみんな」
摩理の言葉が戦闘開始の合図となった。

「紫電一閃」

「ラケーテンハンマー」

シグナム・ヴィータの一撃を受け止める、リインフォースモドキ。だが動きを止めた瞬間を狙い撃つように、

「アクセルシューター」

「プラズマランサー」

なのは・フェイトの射撃魔法が襲う。瞬時に退避するシグナムとヴィータ。

だが……

「盾」

リインフォースモドキは簡単にそれらを防ぐ。

「にははは。いくらなんでも防御堅すぎだよ」

なのはは乾いた笑みを浮かべる。

「ああ全くだ。接近も含め私達の攻撃をことごとく防御しきる能力。厄介きわまりない」

シグナムも呆れたようにつぶやく。

そう、戦闘開始から二十分を経過しているがいまだに、あのリインフォースモドキの防御を破る事は出来ていなかった。

そのくせ、向こうは攻撃し放題。しかも先程などなのはから蒐集したデータを基にして作られた、スターライトブレイカー広域バージョンを全員で防御したせいで、魔力・体力共にかなり削られている。

「て言うか、高町なのは！あのスターライトブレイカーってなんだよー！！むちゃくちゃ防御しずれーぞー！！」

「にゃ！？ヴィータちゃん！？そんなこと言われても……」

「確かに、あれでかなり魔力を削られた」

ザフィーラも苦しい声でヴィータに同意する。

「うん。なのはのスターライトは防御の上からでも墮とされるから

……………」

フェイトも自分の経験からそう言つと、

「フェイトちゃんも！？ひどいよ！」

涙を浮かべるのはだった。

「みんな意外に余裕があるみたいで安心したわ。でもお喋りしてる
とまた、なのはのスターライトを撃たれるわ。なるべくチャージの
時間を与えないようにしましょう」

全員が少なからず疲労している中、妙に余裕な摩理。

「……………摩理。お前、実はかなり余裕あるだろ」

「ええ、そうね。まだまだ余裕があるわ」

「だー！！だったらもう少し本気出せよ！あたしらみんな結構本気
だぞー！！」

摩理の余裕な態度に、痼癢を起こすヴィータ。その様子にやや困
つたように摩理も表情を曇らせる。

「摩理ちゃん。確かに摩理ちゃん的能力が最後の決め手だけどここ
で負けたら、最後も何もないわよ」

シヤマルもこの状況でかなり疲労しているのだろう。ヴィータに
同意した。

「……………そうね。出来れば私がつと前に出られればいいと思う
わ。でも駄目よ。はやてを人質に取られているわ」

「！？どう言う事だ」

今まで冷静にしていたシグナムが、表情を厳しくして訊ねた。他
の皆も程度の差はあれ同様に表情が厳しくなる。

「そうね。私も気の所為だと最初は思ったわ。でも何度か攻撃して
確信したわ。あのリインフォースモドキ。私の力を知っているわ」

「それは、そうよ。摩理ちゃんも蒐集されたんだから」

「言い方が悪かったわ。あの子、私の詳細なデータを持っている。

多分私が攻撃する時だけ、障壁の強度を防げるギリギリまで落とされているわ」

「はあ！？そんなことしてアイツに何の得があんだよ」

「多分警告ね。もしお前が少しでも力を加えたなら、はやてを道ずれに死んでやるとも言いたいのかしら？」

「……………だとすれば、あれはかなり摩理を警戒しているのだろうな」
ザフィーラは難しい表情でそう言う。摩理も同意見だ。だが……………
「そこが判らないのよ。私を警戒する。そこまではいいわ。だってらもつと私に集中攻撃をしようとする筈よ。でもあのリインフォースモドキは明らかにみんなを狙っているわ。いえ、こう言いかえるべきね。みんなの魔力と体力を削る為に戦っているように見えるわ」
「……………！！」「……………」

摩理の推測に、全員が驚く。確かに結果を見ればそうだろう。摩理以外の全員が僅かながらに手傷を負い、体力、魔力を消耗している。

しかし摩理はほぼ無傷。しかも魔力の消耗もそれほどでもない。

あのリインフォースモドキが摩理を脅威に考えるなら、摩理の力を有利な今のうちに削ぐ事を考えるだろう。

だが現状は逆。最高戦力の摩理を温存させ、それ以外の人間の戦力を削ごうとしている。

その意味は……………

「じゃあ、なにさ。あいつはあたしら全員を倒した後に、摩理と全力でやりあおうとか考えてるとか言うつもりかい？」

アルフはどこか納得いかないように自らの考えを言う。

だが誰もそれを否定しない。

「うちのバトルマニアのシグナムじゃねーんだ。そんなこと考えるわけねーだろ！大体アイツは暴走するだけのプログラムだろ？そんなこと考えるわけーし」

「でもヴィータ。貴方達もプログラムなのよね。だったらあの子に意思が芽生えても不思議は無いわ」

「……………確かに摩理の言う事は理解できる。だが、何故今回なのだ？今回闇の書の主である主はやてがやさしい主である事以外、特に変わった事は無かった。暴走プログラムに意思を芽生えさせるような？イレギュラー？は無かったぞ」

シグナムの何げない言葉。その言葉を聞いて摩理は『それ』に思い至り、蒼白となった。

「どうしたのだ摩理？」

「まさか、そうよ、なんで忘れていたの！私がどういう存在なのかを！！」

摩理は取り乱したように叫んだ。

「え？摩理ちゃんどうしたの？落ち着いて！？」

摩理の突然の取り乱しように慌てるなのは。

「どうしたんだ摩理！！いつも冷静なお前らしくない」

「解つたのよ。いいえ、解っていたはずなのに忘れていた。はやてや貴方達との生活が楽しくて。一人で戦う事無く、仲間と共に闘うことが嬉しくて。自分が闘う事で大切な人を救える事が誇らしくて。なによりここは誰もが私を？花城摩理？と呼んでくれる！！それがたまらなく居心地が良かった！！」

摩理の叫びは誰も理解できなかった。摩理自身、誰にも理解されない事は解っていた、でも叫ばずにはいられなかった。

「ここにいる筈の無い私が！！？バグ？である私が！！そんな私のリンカーコアを蒐集して何の？バグ？も起きないはず無い！！先生が言つとおり、私が、？バグ？である私が、何かを変えようとするなら、必ずそれを正そうとする者が現れる！！そうなんですよ！！」

摩理の最後の叫びはリインフォースモドキに向けられていた。そして……………

「……………やっと、やっと気づいてくれたね。初めまして、だね？ハンター？花城摩理」

これまで終始無表情だったリインフォースモドキは、まるで無垢な少女のように優しい笑みを浮かべた。

第十四話 目覚めし者

「……………馬鹿な。そんな、暴走するだけのプログラムが意思を持つただと!？」

シグナムは驚愕しながら、リインフォースモドキを見つめた。

他の守護騎士も同様に驚愕していた。

当然と言えばある意味当然だろう。あの暴走プログラムは元々は一つでは無く、無数の改編によって偶然生み出されたいわばプログラムの集合体。

継ぎはぎだらけの存在だ。シグナム達のように意思を持つ下地のあるプログラムでは無い物が意思を持った。そんなイレギュラーな存在をシグナム達はただ見つめる事しかできなかった。

「初めましてだね。ヴォルケンリッターのみんな。私は貴方達が暴走プログラムって呼んでる存在だよ」

「えっと、暴走プログラムさん」

「ん？なに？高町なのはちゃん」

「えっと、その、はやてちゃんは？」

「ああ。夜天の主ね。あれなら私と夜天の書の切り離しを終えて、私から出ようと念話を飛ばしてるよ。もちろん私が妨害してるけどね」

暴走プログラムはまるで、ちょっとした悪戯を話すようにはやての事を話した。

「なッ！はやてを放せ!!」

はやてを閉じ込めていると聞いたヴィータは真っ先に噛みついた。だが

「ヤダ。摩理が私と本気で戦う。貴方達が手を出さないって、約束したら、解放してあげるよ」

「なッ!？なにを訳の分からない事を言っている!!今すぐ主はやてを解放しろ!!さもなければ」

「ん〜？どうするの？私ごと主を殺す？出来るの？シグナム」
「ぐッ！！」

思わず激昂に駆られたシグナムだが、はやての命を盾に取られれば何もできなかった。

「なんで君は、摩理と戦いたいの？シグナム達守護騎士はやてとなら……まだ解る。でも摩理は関係ないはずだよ」

フェイトの問いに暴走プログラムは、少しだけ考え頷く。

「うん。私にとってヴォルケンリッターも夜天の主も興味無い。あ、勿論リインフォースも。でも？ハンター？花城摩理は別。私にとつて特別だよ。これが理由かな？」

「訳分かんない事言つてんじゃねーよ！！てめえがあたし達やリインフォースに恨みがあるつてんなら幾らでもやってやるし、納得もいく。だけどな、かんけーねえ摩理はやてを巻き込むなら容赦しねーぞ！！」

「だーかーらー夜天の主もあんだ達、夜天の魔道書の騎士も管理者も興味無いよ。もちろん管理局の魔道士もね。でも摩理は別。摩理は私を？私？にしてくれた。だから確かめたいの。花城摩理が本当に蒐集で知った通りの、私の求める人なのかどうかをね」

暴走プログラムの言っている事は誰にも理解できなかった。だが一つだけ確かな事がある。摩理が暴走プログラムと戦うという事を承諾する。そしてそれに誰も手を出さないと約束する。

それらの条件がそろわない限り、暴走プログラムははやてとリインフォースを解放するつもりは無いという事を。

「いいわ。全力で貴方と戦つてあげる。代わりに今すぐにはやてとリインフォースを解放しなさい。あの二人がいたら私も全力を出せないわ。みんなもいいわね」

摩理の言葉に全員が渋々頷く。本当ならこのような提案を受け入れたくは無いだろが、人質がいる以上選択の余地は無い。

「えへへへ。さすが？ハンター？花城摩理。いいよ。すぐにも解放してあげる」

そう言つと、暴走プログラムは手をかざした。生まれるのは白い光。

白い光はゆつくりとなのは達の下に辿り着くと、はじけ一人の少女の形となる。

白と黒の騎士甲冑を纏つた八神はやてへと。

「はやくと出られたわ」

「はやて！大丈夫？怪我は無い？」

真つ先にはやてに抱きついたのはヴィータだった。

他の面々も嬉しそうにはやてに駆け寄る。

「よかつた主はやて。お怪我は？」

「はやてちゃん無事でよかつた」

「主はやて、ご無事で」

「よかつた、はやてちゃん」

「無事なんだね、はやて」

「お、え、みんないっぺんに言われても困るよ」

慌てるはやて。だがこの中で一番付き合ひの長いはずの摩理だけは、はやてに近寄る事無く暴走プログラムを睨み続けた。

「うん。これで約束は守つた事になるよね？じゃあ摩理、戦おうね」
暴走プログラムはそう言つと、周囲に大量の雷の魔力球を作り出す。

フェイトの魔法を改良した魔法。フォトンランサー・ジエノサイドシフトだ。

暴走プログラムがそれを摩理たちに向けて放つ前に、摩理はアリスを振るい、周囲に銀色の鱗粉が吹きあがる。

摩理は吹きあがる鱗粉をまるで階段を駆け上がるように、疾走。暴走プログラムのフォトンランサーと正面から激突した。

「……………なあ、これ、どないな状況？」

完全に現状を理解できないはやては難しい顔で皆に訊ねると、他の皆も困惑の表情を浮かべた。

「……………私達もいまいちよくは解らないのですが、暴走プログラムに自我が芽生えたうえ、主はやての命を盾に摩理との決闘を要求し、摩理はそれを受け入れました」

シグナムの簡潔な説明に、はやては眉をひそめた。

「なんで暴走プログラムが摩理と戦いたがるんや？しかも暴走プログラムに自我が芽生えてるって……………リインフォースも知った？」

「……………いえ、今、この場であの暴走プログラムを見るまで知りませんでした」

どこか自分自身でさえ、目の前の光景が信じられないような口調で言うリインフォース。

だからこそ疑問が膨らむ。あの暴走プログラムは一体？なにもの？なのか。そして何故摩理との戦いを望むのか？皆の疑問は膨らむ。そんな疑問が渦巻く中、摩理と暴走プログラムの戦いは激しさを増した。

「はああああ！！」

摩理は空中を疾走しながら、アリスを振るう。アリスから放たれる鱗粉が銀色の刃となって暴走プログラムの障壁に衝突する。

摩理の攻撃を難なく防御してのける暴走プログラムだが、その様子に摩理には焦りが無かった。

(……………やっぱり単調な攻撃は通らないわね。でも、この程度なら私の敵では無いわね)

これまでの戦闘で摩理は暴走プログラムについてある程度理解していた。

圧倒的な魔力に、多彩な魔法、強靭な防御。そして、圧倒的な面

攻撃。

並みの魔道士や騎士なら、まず手も足も出ないだろうが、摩理にとってはそれほど苦にはならなかった。

所詮魔道士。摩理の速度には基本追い付けない上に、摩理の鱗粉による防御もいまだ崩せない。

そして摩理は自身の『全力の攻撃』をあの暴走プログラムが防げるとは思えなかった。

というかそもそも摩理の全力の攻撃を防げる存在に、摩理は今まで出会った事が無い。

生前もそうだが、死後も防げそうなの？虫憑き？は数人いたが、彼らと本気で戦う前に戦闘は中断して実際に試す機会は無かった。

摩理の全力を受けても死ななそうな存在にも出会ったが、それを試す機会も無かった。

この世界でも、摩理の全力を耐えそうな存在には遭遇した事が無い。

だから摩理はあの暴走プログラムに『全力』の攻撃を叩き込む事に決めた。

摩理は暴走プログラムの攻撃を回避しながら、アリスに力を込める。アリスの表面に刻まれている銀色の模様が輝きを強める。同時に摩理の体に浮かぶ模様も強い輝きを放つ。

全身が銀色の輝きに包まれた摩理は、一気に暴走プログラムとの距離を取る。そして一直線に暴走プログラムに突撃した。

暴走プログラムはそれを見ると、集中砲火のごとく魔力弾を摩理に向けて解き放つが、摩理を包む鱗粉がそれらを防ぐ。

降り注ぐ魔力弾の嵐を摩理は、一直線に突き進む。魔力弾が直撃しようが摩理の速度は変わらない。むしろ一歩踏み出すごとに速度が速くなっている。

最初は駆け足程度の速度だったが、今はフェイトの全力飛行速度並みだ。

銀色の閃光となった摩理は、自身の加速の勢いとアリスに込めら

れた魔力を全力で暴走プログラムに叩きつける。

さすがの暴走プログラムも今までの防御では、摩理の全力を耐えきれないと判断したのだろう。全ての魔力を防御に回し、摩理の一撃に備えた。

摩理の全力の一撃と、暴走プログラムの全力の防御。その衝突は見えない衝撃となって周囲の空気を震わせる。

「なんとか、命拾いしたね……………」

暴走プログラムの体には無数の小さな傷が刻まれていた。その体を引きずるように地面に着地すると、そのまま崩れ落ちそうになる。先程の摩理の一撃。もしあとほんの少しでも防御魔法が弱ければ、確実に消滅されていた。

いやあのままだったら、確実に摩理に消滅させられただろう。暴走プログラムが生き残ったのは小さな偶然だった。

摩理の弾いた魔力弾の一つがたまたま消滅せずに残っていた事、そしてそれに摩理が気付かなかった。

その魔力弾を摩理のアリスに当てる事によって、わずかに軌道をずらす事が出来た。

（あとほんのわずかな時間さえあればいいはずだね。それさえ稼げれば……………きつと、摩理は、私は……………！？）

ボロボロの暴走プログラの前に無傷の摩理がたたずんでいた。そして一切の躊躇無くアリスを暴走プログラムの胸へと突き刺した。

「これで終わりよ。滅びなさい！」

「……………凄く残念だったね摩理。あと『ほんの数秒だけ遅ければ、本当に全部終わらせる事が出来たのにね』」

暴走プログラムの言葉と同時に、摩理の貫いた胸から何かが這い出してきた。

？それ？を見て摩理は茫然とした。そうそれはこの世界に存在する事の無い忌まわしいモノ。かつて摩理が探し求めていた人物が持つ絶望を象徴するモノ。

黒いクマムシ。

クマムシは暴走プログラムの胸から這い出ると、一気に増殖を始めた。摩理はとっさにアリスの力でそれを止めようとするが、遅かった。

無限に増殖しているのでは、と、思える速度で増殖を続けるクマムシ。

クマムシは暴走プログラムの欠損部分を次々と修復し始める。

ただその光景はおぞましかった。

大量のクマムシが暴走プログラムを形作るような光景。

おそらく遠くで見ているはやて達はこれを見て、呆然としているだろう。

摩理自身も何度か見ているが、これはどうしても慣れる事が出来ず未だにおぞましく感じる。

修復を終えたクマムシの群れは、一斉に摩理を見る。

摩理の存在を天敵だと認知したのだろう。一斉に襲い掛かる。

摩理はアリスの鱗粉で防御するが、クマムシはそれさえも喰らう。

普段の摩理ならば、ここは防御では無く、一時離脱し、態勢を整え一気に殲滅する事も出来ただろう。

たとえ相手が？不死の虫？でも……

だが今回は摩理も冷静で無かったことが災いし、とっさの判断を誤った。

そしてもう一つ摩理にとって最悪の事柄が存在した。

(……………拙いわね。さっきの一撃に魔力を消耗しすぎたわ。このままじゃあ防御もいつまでも持たない！それに、離脱するタイミングも……………)

絶望的な状況の摩理だが、それでも望みは捨てきれなかった。

(……………最後の賭けね。私の能力を展開して不死のクマムシを

殺す！！）

摩理はそう決意すると、防御を解き、眠りの鱗粉を解き放った。

眠りの鱗粉に触れクマムシ達が眠り落ちて行くが、クマムシの増殖速度は摩理の？眠りの力？をはるかに超えていた。

（……失敗ね。魔力が残り少なかった事、そして、みんなの力を借りなかつた事が、私の敗因かな。………みんなごめんね）

摩理は眠りの鱗粉ごとクマムシの群れに呑みこまれた。

第十四話 目覚めし者（後書き）

パソコントラブル、そしてリアルな事情により更新遅くなりました。読んでくれる人達には本当に申し訳なく思います。

これからはもう少し更新ペースがあげられたらと思います。

闇の書事件編もあと数話で完結を予定しています。その後の展開は未定の部分も多いですが、続くはずですので長くお付き合いできれば幸いです。

第十五話 夢見る者達

摩理がクマムシの群れに呑みこまれる様をはやて達は見ている。見ている事しかできなかった。誰もが目の中の光景に啞然とし、摩理の援護をする事も出来なかった。

その場に残ったのは、暴走プログラム、クマムシの群れ。そして無残に喰いつかれ、かろうじて原形をとどめているアリスだけだった。

その光景を見て、摩理の生存を期待できるはずもなかった。はやてはその場に崩れ落ちた。目の前の光景が信じられず、なにも考えない人形のように。

どれ程の時間が経ったのか、はやてには解らなかった。

だが誰かがクマムシと暴走プログラムに対して攻撃を始めた事により、はやての意識も現実に戻ってきた。

初めに攻撃を始めたのが誰かは、はやてには解らなかった。

だがはやてにも解る事があった。

怒りだ。

全員の攻撃にどうしようもない怒りを感じた。

そしてその怒りは、直ぐにはやてにも伝わった。

はやては覚えて間もない魔法を、怒りの命じるまま、暴走プログラムとクマムシの群れに叩き込んだ。

だがクマムシは一向に減らず、暴走プログラムも幾ら攻撃してもクマムシがすぐにその損傷を埋め合わせる。

?不死?を殺す為の悲しい戦いが始まった。

「ここは何処かしら?」

真つ暗な空間に摩理は一人たたずんでいた。

クマムシの群れに呑みこまれ、また死んだと思っていた摩理は少しだけ妙な気分になった。

「何度も死を体験して、また現世に舞い戻る。ある意味私も？不死？ね。でも今回の事は貴女がやったんでしょ？」

摩理は闇に向かって声をかける。

返事は無かった。だが摩理は一人ではなくなっていた。

現れたのは、5、6歳くらいの少女だ。だが摩理はその少女を初対面の相手とは認識していなかった。

「初めまして。それとも久しぶりの方が正解かしら？ねえ、貴方はどう思う？アリシア」

それがフェイトのオリジナルたる少女アリシア・テストロッサと摩理の再会だった。

「その、摩理はいつから私ことに気付いていたの？」

「そうね。前から何となくアリシアの存在を感じてたけど、ハツキリと認識したのは蒐集後かしら」

「そっか、なら体の事とか大体わかつちやった？」

「そうね。解らない事の方が多いと思うわ。でも、大体の事は推測できるわ。今の私の体。本当は貴女の体なんですよ」

摩理の問いにアリシアはゆっくりと頷いた。

摩理は前々から不思議に思っていた。今の自分の体は一体、誰のものだろうと。

大体自分の体はとうの昔に無くなっている筈だ。それが存在すること自体在りえない。

なら今の自分の体は、他人の物なのでは。という予測はあった。

時折見るフェイトに似た少女の夢、そしてフェイトに対する妙な心の反応から見て、摩理はこの体がフェイトの身内、多分姉妹だと

推測していた。

それに先日きちんと確認を取っていた。アルフにこっそりこう訊ねたのだ。

「ねえ、フェイトの亡くなった姉妹って、フェイトそっくりだった？」

アルフは驚愕し、そのことで問い詰められた。だが摩理はそのアルフの問いは上手くはぐらかし、逆に自分の知りたい情報をうまくアルフから聞き出すことに成功し、おおむねアリシアの事を知る事が出来た。

もつとも、まさかアリシアが闇の書の魔力蒐集時に、一緒に蒐集されてしまったことには驚いた。

「……………今の私是一种の情報だけ存在なの。だから闇の書も摩理の魔力情報と私の区別がつかなかったんだよ」

アリシアはそう言うのと、蒐集されてからの事を話し始めた。

最初は何もできなかったが、摩理から蒐集したデータを闇の書が自身に適合し始めてから、闇の書に異変が起きた。

摩理の魔法。正確に言えば、アリスの能力は闇の書の機能を用いても再現は出来なかったが、代わりに摩理の知識にある？虫？はある幾つかの条件を満たせば再現できた。

だが、本来であればそこまでして摩理の記憶にある？虫？を再現するメリットなど無いはずだが、何故か闇の書の暴走プログラムは摩理の記憶の？虫？を再現するために自身を組み変え始めた。

まず一つ夜天の魔道書の切り離し。

もともと闇の書の元となった夜天の魔道書はベルカ式で魔法を使うことを前提に作られているので、？虫？の力を行使するにはむしろ邪魔となる。

なので闇の書の暴走プログラムは夜天の魔道書の機能を完全に捨てる事にした。

そして新たな管理者。

今の管理者はあくまで疑似的に作られた感情を持つプログラム。

人間のように自ら？夢？を思い描く事は無い。

そこで目をつけたのが、偶然蒐集したアリシアの意識だった。

アリシアの意識を管理者にする事によって、？夢？を原動力とする？虫？の制御をおこなえる。

そして最後の問題が、使用者だった。

摩理から蒐集した知識だけでは完全ではない。なので闇の書暴走プログラムは最初の主を摩理にする事に決めた。？虫？に対する唯一の情報源にして、多くの知識を持ち、そして存在その物が？バグ？である『花城 摩理』を求めた。

「でもね、あたしは摩理にそんな物を押しつけたくなかった。だから闇の書と一緒に死のうとした。でも、駄目だった。闇の書の暴走プログラムは摩理を求めていて中途半端な干渉も効かなかった。だから私は闇の書の暴走プログラムの意識とシンクロさせて行動を微妙に捻じ曲げて、摩理に闇の書の暴走プログラムごと私を殺してもらうはずだった。

でもそれを感じた闇の書の暴走プログラムが不完全だけど一匹の虫を再現したの」

「……………？不死の虫？あのクマムシね」

「うん。私も全力で抑えたよ。でもあと数秒で一時的に機能を凍結出来る筈だった。でも」

「……………その前に私が止めを刺してしまったのね」

摩理は少し沈んだ。

いくら知らなかったとはいえ、アリシアの頑張りを台無しにしまったのだ。ショックは隠せない。

「うん。でもあれは仕方が無いよ。摩理は何も知らなかったし、私も何も言わなかったから……………」

「ふふ。そう言ってくれると、私も少しだけ気が楽になるわ」

摩理は微笑を浮かべたがすぐに表情を改めた。

「それで今の状況は？」

「うん。闇の書の暴走プログラムは摩理を取り込んだけど、でも今

すぐには動けないの。摩理の眠りの力の所為で」

「そう。なら今なら私とアリシアで闇の書の暴走プログラムに干渉できるのかしら？」

「え？出来るよ。でも！それには摩理が闇の書の主になるってことだよ。また？夢？を食べられるんだよ！！」

「アリシア。『私達』を勘違いしないで。私は？虫憑き？なのよ。？虫憑き？が夢を食べられるのは当たり前。その痛みは『私達』がよく知っているわ。でもその程度の痛みで私達が？自分の夢をあきらめると思っているの？！！」

「！？それは、でも！！」

「それにね。今の私の夢は誰にも食べきれないわ。はやてや、みんながここにいる限り、今の私の夢『大切な人達と共に生きる』って夢を食べきれるはずが無いわ」

摩理の微笑と共に語られた夢に、アリシアは必死に反論した。

「！！そ、それはそうかもしれないけど……でももし夢を食い尽くされたら、死んじゃうかもしれないのに！！」

「大丈夫よ。だって貴女の夢も今の私の夢と似ているんでしょ？だったら、なおさら闇の書の暴走プログラムでも食べきれるはずが無いわ！だって私達二人の？夢？よ」

「……………」

摩理の確信に満ちた宣言に、アリシアは何も言えない。おそろく摩理なら闇の書の制御に成功するだろう。という確信もあるが、どうしてもアリシアはすぐに首を縦に振る事が出来なかった。

摩理の記憶から見た虫憑きの最後。

それはどれもが、悲しい終わり方だった。得に摩理自身の記憶ではないが『モルフオチョウが残した記録』にある、『流星群の夜』の結末にはアリシアは絶句し、自然と涙をこぼした。

だからこそアリシアは思うのだ。今の闇の書をこのまま世に出してはいけないと。

今の闇の書は暴走すれば、まず間違いなくこれまで以上に多くの

未来を奪う。

摩理なら制御できるだろうが、あんな物をたった一人の人間に押し付ける事が正しいとはアリシアには思えなかったが、他に選択肢は無く、結局首を縦に振った。

「……………これが、闇の書のコアね」

そこには無色透明の球体が静かに浮かんでいた。

「うん。今までの闇の書のコアには闇の書に関わった人達の怨念が纏わりついてたけど、今はあの？クマムシ？が怨念を取り込んで外で暴れているから、今のコアはほとんど純粋な存在だよ」

アリシアの説明を聞いた摩理はゆっくりとコア近づき、そっと手を触れた。

瞬間、コアは激しく発光し、摩理の意識を乗っ取るうと干渉を始めた。

「ッー!!」

コアの精神干渉と共に摩理の心に空洞が生まれる。その感覚を摩理は知っていた。

「夢？をコアに喰われているのだ。」

久しぶりの？夢？を喰われる感覚に、摩理は一瞬膝をつきそうになるが、摩理はこらえ、コアを直視しながらコアに語りかけた。

「……………アナタは、何故？虫？の力を求めるの？」

摩理の問いかけにコアの発光が弱まる。それと同時に摩理への精神干渉と？夢？を喰われる感覚も弱まる。

さらに摩理はコアに問いかける。

「アナタの望みは？本当にアナタが望むのは一体なに？」

摩理の問いかけにコアは、なかなか答えなかったが、小さな声で

答えが返ってきた。

『……………私は、？私？になりたい』

コアはゆっくりと自らの望みを口にした。

コアの望みを聞いた摩理は自分からは何も言わず、かつて亜梨子が摩理にそうしてくれたように、コアが自分から話してくれるのを待った。

どれくらいの間がたったのか？夢？を食われている摩理には解らなかったが、やがてコアは躊躇いながらも話し始めた。

『……………私はいままで様々な人達が、夜天の魔道書を自分の都合のいい道具にする為に加えたプログラムの集合体だった。意識なんて無かったし、主や管理者、守護騎士達も私にとつては近くにいただけの無関係な存在だった。私は集められた醜いヒトの欲望を実行するだけの存在。でも、貴女のリンカーコアに接触して思ってしまった。気の遠くなる長い年月の中で私は、ヒトの歪んだ欲望をただ実行するだけの存在で無く、誰かに必要とされる？私？になりたいって事に気付いたの』

コアの告白に摩理はなにも言わずただ耳を傾ける。

『そして摩理の記録の中から、？虫？を知った。？虫？は宿主に忌み嫌われているけど、それでも宿主と共にあり続けて唯一無二の存在であり続けられる。だから私も……………』

「そう。それがアナタの？夢？なのね」

『え？？夢？？だって私は人間じゃないのに……………』

「関係が無いわ。それに記録程度を見て虫憑きを理解したつもりにならない方がいいわ。虫憑きの？夢？は願った本人とつて、どんな事をしてても、どんなに挫折そうになっても、どんなに辛い思いをしてても、それでも諦めきれない願いの事よ」

摩理の語る虫憑きという存在に、コアは勿論、傍らで様子を見ていたアリシアもなにも言えない。

「アナタの願いも、きつとそうなんでしょ？どんなに苦しくても、難しくても、それでも諦めきれない願い。だからアナタは本来存在

しない存在を具現化できた。ならアナタの願いは、虫憑きが抱く？夢？と変わらないわ」

摩理は優しく微笑みながら、さらに言葉を重ねる。

「だからアナタの？夢？を私達に聞かせて」

『私の………私の？夢？は『誰かに必要とされる私であり続けたい』』

「良い？夢？ね。なら私が、アナタのマスターとして在り続け、必要とし続けるわ！私の？夢？『大切な人達と共に生きる』」。

私が？夢？を持ち続ける限り、ずっと……

アリシアも一緒よ。いいわよね？」

「勿論だよ！摩理」

『……解りました。改めてこれから末永く私をお願いするね。？ハントー？うん、マスター花城摩理』

二人の同意を得られた事により、コアに変化が起きた。無色透明な球体が一冊の本へと変化する。

白と銀で装飾され、表紙には今は存在しない摩理の？虫？を思わせる銀色のモルフオチョウが描かれた魔道書に。

『マスターさっそく私に名を授けてください。新たな？私？の存在を表す名を』

コアにそう言われると、摩理は少しだけ困った顔をした。

「………名前をつけるなんて初めてだから、いい名前かどうかかわからないけど、それでもいいかしら？」

摩理はそう前置きすると、コアの新たな名を口にした。

「『夢の書』……私達、虫憑きの夢を理解し具現化するモノ。だから夢の書よ」

摩理がそう言うと、コア。いや夢の書は静かに摩理のすぐ傍まで浮遊し近づいてきただけで、なにも言わなかった。

摩理は名前が気に入らなかつたのかと思ったが、隣にいたアリシアが忍び笑いをしながら、小さな声でそっと摩理に耳打ちしてきた。「きつと照れてるんだよ。声に出したら摩理にそのことがバレるか

ら黙ってるだけだよ」

小さな声にもかかわらず、夢の書はアリシアの言葉を聞いたのだろう。無言で自らの体をアリシアの頭に叩きつけてきた。

「い、痛いよ！夢の書！！」

涙目になりながら不満を言うアリシアに、どこか怒っているように見える夢の書を摩理はどこか微笑ましく見守っていた。

だが突然摩理の表情が一転した。その表情は？ハンター？のモノだ。

「二人とも、準備して。何か来たわ」

摩理の言葉だけではなく、周囲に張りつめる気配に、先程までどこかふざけ合っていたアリシアと夢の書の雰囲気が変わった。そして、

「『イエス。マスター』」

声を揃えて摩理に従う。

周囲を警戒する摩理の視線に飛び込んできたのは、黒い？不死？のクマムシの群れだ。

「……どうしてここにも、？不死？の虫が？」

「多分、夢の書が摩理を主に認めたから、闇の書に込められた怨念が摩理を完全に閉じ込めて、力だけを奪おうとか思ってたの行動かな？」

『……それだけじゃないよ。摩理は自分を滅ぼせる力を持つてる事を本能で理解してる。いわば怨念の防衛本能だね』

アリシアと夢の書の推測に、摩理は嗤った。

「ふふふ。ずいぶん警戒されたものね。でも、私はもう何処かに閉じ込められるのはウンザリなの！！それとも一つ。今の私達を止めるには、この程度では足りないわ！！」

摩理はそう言い放つと、夢の書に手をかざした。

今の摩理の手にはアリスが無い。頼れるのは夢の書とアリシアだけ。だから、摩理は一切の躊躇い無く二人の力を信頼した。

かざした手から、夢の書の能力。そしてアリシアの役割を理解し

て、思わず苦笑した。

「これは……少しだけズルいわね。でも……凄く嬉しいわ!! 夢の書! ダウンロード!? ハルキヨ?!!!」

瞬間、夢の書がものすごい勢いでページをめくり、ある項目で止まると同時に、アリシアが紅蓮の業火に包まれる。

炎に包まれたアリシアだが、次の瞬間、炎の中にアリシアの姿は無く。代わりに一匹の? 虫? が存在した。

紅蓮の業火その物だと思わせる炎に包まれた? オオエンマハンミヨウ?

? オオエンマハンミヨウ? が摩理の周囲をグルリと回っただけで、周囲が一瞬で紅蓮の業火に包まれる。

その光景はまさに灼熱地獄を思わせる。

かつて摩理が出会った、最強の虫憑きの一人? ハルキヨ? の能力を夢の書を使って再現したのだ。

摩理自身この光景に少し驚いた。夢の書が虫の能力を再現できる事は、手をかざした時点で理解したが、まさかオリジナルとほぼ同じレベルにまで再現されるとは思わなかった。

「…………訂正するわ。この力、反則ね。でも、まあいいわ。ここから出るには丁度いいわね」

摩理はそう言うと、ある? 虫憑き? の項目を探す。

探していた項目はすぐに見つかったが摩理はすぐには、ダウンロードしなかった。

その人は摩理にとって一言では言い表せない関係にあつた人物であり、摩理と亜梨子の恩人でもあり、最初から最後まで摩理の存在を信じてくれた人であり、そして、摩理とよく似ているけど少しだけ優しい人だ。

だからその人の力を使うのは嬉しくもあり、頼もしくもあり、そして懐かしい。

摩理はその人の名に恥じないように、声を高らかに? 最強の悪魔? の名を口にする。

「ダウンロード!? かつこう・薬屋 大助?」

その瞬間、周囲を灼熱地獄に変えた? オオエンマハンミヨウ? は姿を消し、代わりに緑色の異様に触覚の長い? かつこう虫? が摩理の肩に止まる。

? かつこう虫? はしばし全く動かなかつたが、突然、声無き声で鳴くと、今まで纏っていた? ハンター? の装備が再現されたバリアジヤケットが、ベルトが幾つも付いた漆黒のロングコートに軟金属製のブーツ。手には革製の手袋。そして顔を隠すほど大きなゴーグルへと変化した。

「え? これは……」

困惑した声を上げる摩理。摩理もさすがにこれは予想外だった。

摩理の今纏っているバリアジヤケットの形状は、彼、? かつこう? の戦闘時の装備と同じだ。

予想外の事態に摩理は混乱しそうになるが、いつの間にか手に何か握っている事に気付き、握っているモノを見て驚いた。

大型の自動拳銃。これも? かつこう? が使っていた装備だ。

混乱する摩理をよそに、? かつこう虫? は自動拳銃に舞い降り、その身を自動拳銃へと沈める。一瞬で? かつこう虫? が銃身に同化した異形の銃へと変化し、さらに銃から無数の触手が伸び摩理に絡みつく。

摩理がアリスと同化した際に浮かぶ模様に凄くよく似た緑色の模様が全身に浮かんだ。

「……………ふふふ。さすがにこれはサービスのし過ぎじゃないかしら? でもこれで完全に負けられなくなったわ! 彼は、薬屋大助さんは、たかが怨念如きに負ける事なんて絶対無いわ!! さあ見せてあげるわ! 最強の悪魔の力を!!」

摩理はそう言い放つと、? かつこう虫? が同化した銃を? クマムシ? の群れに向け、発砲した。

拳銃から放たれたとは思えない砲撃音と共に放たれた銃弾が、? クマムシ? の群れごと空間を打ち抜いた。

第十五話 夢見る者達（後書き）

ハイ、いろいろ勢いでやってしまった今回です。

冗談抜きで摩理さん無双&チートモードになっています。まず間違いないのはやて以上の生きたロストログニアですね。

さて次回は闇の書の暴走プログラム&?クマムシ?の殲滅タイムです。ムシウタ・バグでは殲滅できなかった不死の?クマムシ?を殲滅して御覧に入れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7891u/>

魔法少女リリカルなのは 夢甦る銀槍

2011年11月1日02時08分発行